TIGER & BUNNY
THE RISING

SOUVENIR PROGRAM
SPECIAL EDITION
feat. STERN BILD Heroes

HEROES CO

INTRODUCTION

シリーズ集大成——
不屈のヒーローの姿が
人々の胸を打つ!!

2011年4月のテレビ放送開始以来、圧倒的な支持を受けた「TIGER & BUNNY」。放送終了後には劇場版を2作制作することを発表。12年9月にはその第1弾として、テレビシリーズ1～2話をベースに新規エピソードを加えた『劇場版 TIGER & BUNNY -The Beginning-』が公開。そのヒットを受け、完全新作になる2作目に対してのファンの期待は否が応にも高まり、完成が待たれていた。

そしてついに、待望の新作『劇場版 TIGER & BUNNY -The Rising-』が公開!!

テレビシリーズ最終話で復帰したヒーローコンビ、ワイルドタイガーとバーナビー・ブルックス Jr.。2部リーグでも活躍するふたりに、突如として1部リーグ復帰の話が舞い込む。しかしその条件は、バーナビーのパートナーを新ヒーロー、ゴールデンライアンとすることだった。結果、自らの境遇やバーナビーの将来のことを考え、身を引くこととなったタイガーだったが、そんななかシュテルンビルトにかつてない大事件が巻き起こる。仲間のピンチに直面したタイガーが取った行動とは!?

思うようにならない世間の厳しさに揉まれながらも、自らの信念に突き進む、そんなヒーローたちの姿に人々は胸を打たれるだろう。

緻密なヒューマンドラマに目を見張るアクション、そしてテンポのよい会話劇と、本作は、「タイバニ」シリーズの集大成にふさわしい興奮と感動を見せつけてくれる!!

シュテルンビルト、最期の日？

ME BACK!!

STORY

マーベリック事件終結後、一時ヒーローを引退するも、その後復帰した
ワイルドタイガーこと鏑木・T・虎徹と**バーナビー・ブルックスJr.**。
1部リーグを退いたふたりは2部リーグのヒーローとして
相変わらずの口ゲンカを繰り返しながらも、街の事件解決に取り組んでいた。
そんな折、バーナビーは、**HERO TV**で活躍する
ブルーローズ、ロックバイソン、ドラゴンキッド、ファイヤーエンブレム
スカイハイ、折紙サイクロンを目にしたことで、「1部リーグに復帰したい」と思わずこぼしてしまう。
バーナビーを軽口で諭しつつ、複雑な想いを抱く虎徹だった。

一方、ワイルドタイガーとバーナビーの所属する大企業**アポロンメディア**は
新たにカリスマ実業家 **マーク・シュナイダー**を新オーナーに迎え
マーベリック事件で受けた痛手からの会社の立て直しを図っていた。
その一環として、シュナイダーはバーナビーの1部リーグ復帰を決定する。
だがバーナビーの相棒に選ばれたのはワイルドタイガーではなく
新ヒーロー **ゴールデンライアン**（ライアン・ゴールドスミス）だった。

ときを同じくして**シュテルンビルト**では奇妙な事件が続発する。
伝説の女神がシュテルンビルトに下した天罰を思わせるその事件は
果たして街の滅亡を暗示するものなのか？
事件のかげに蠢く**3人のNEXT**は何者なのか？
事件の真の目的とは？
様々な謎が入り乱れるなか
女神伝説を祝う**ジャスティスデー**が迫る。
それはシュテルンビルトを守るヒーローたちにとって
最大の危機の到来を意味していた。

シュテルンビルト崩壊の危機に
果たして**バーナビー**は、そして**虎徹**はどう立ち向かうのか――。

そのとき、ヒーローたちは!?

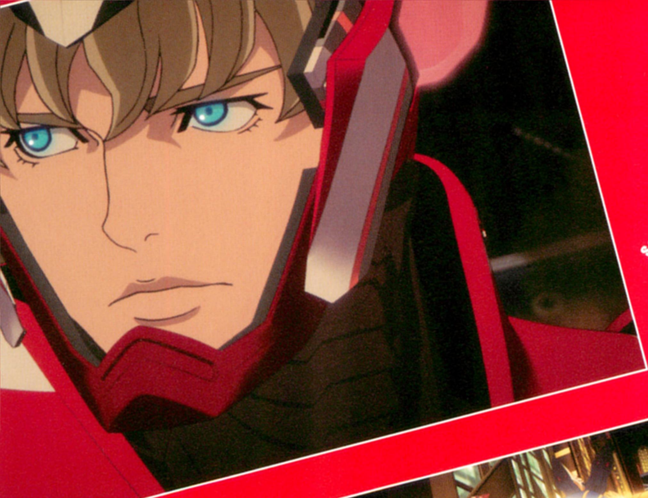
バーナビー・ブルックス Jr.

2部リーグに甘んじているとは言え、沈着冷静な甘いマスクにいまだファンの多いバーナビー。以前はヒーローを仕事と割り切っていたが、ジェイクとの一件が解決してからは、街に暮らす人々のために力を振るっている。それもこれも虎徹の強い信念に感化されてのことなのだが、ことあるごとに自分とはテンポの違う虎徹に呆れることも多く、度々「オジサン」と呼ぶ場面も。

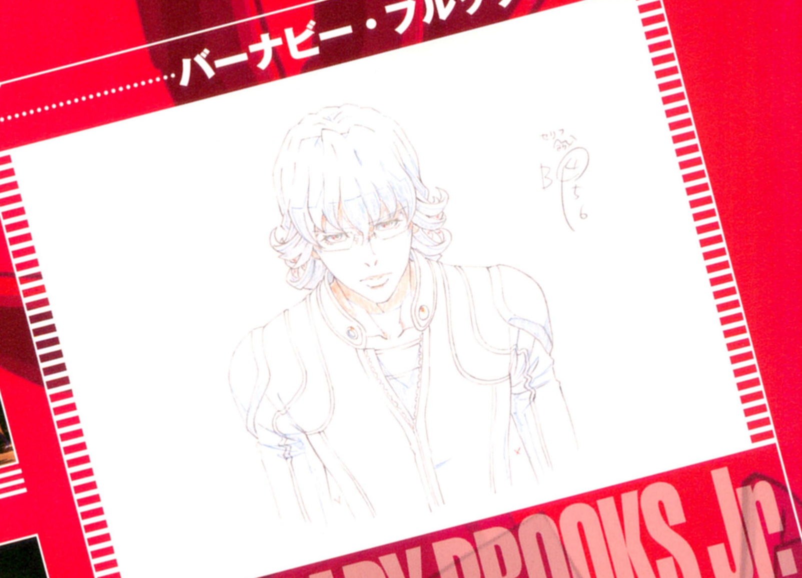
所属▶アポロンメディア
スポンサー▶BANDAI Crusade amazon.co.jp
NEXT能力▶ハンドレッドパワー

僕とあの人はもう関係ありませんから

1度はヒーロー界を去ったが
両親の想いに気づき、ヒーローにカムバックしたバーナビー。
だが2部リーグでの活動に、物足りない想いを抱きながら日々を送っていた。
そんななか降って湧いた話が舞い込み
シーズン途中で異例の1部リーグ復帰を果たす。
ところがコンビとなったのは虎徹ではなく
新ヒーロー、ゴールデンライアンだった……。



scene 01 バーナビー・ブルックス Jr.



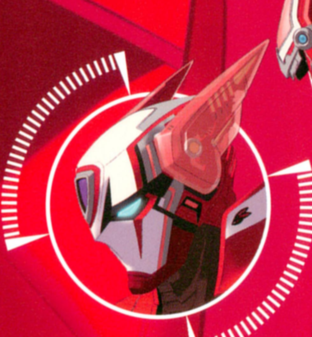
BARNABY BROOKS Jr.

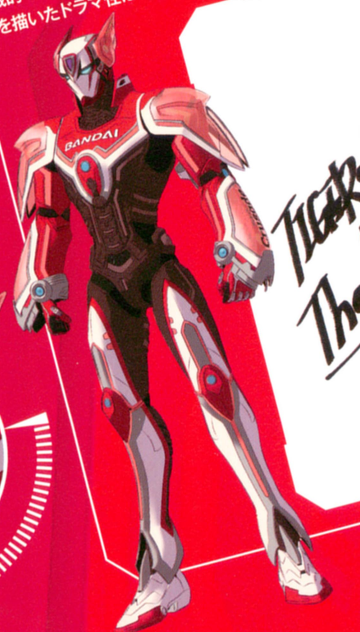
BARNABY BROOKS Jr.

BARNABY BROOKS Jr.

バーナビー・ブルックス Jr.

2部リーグに在籍していたときには以前のヒーロースーツをそのまま着用していたが、1部リーグへの復帰にあわせて新ヒーロースーツ「Style 2」に変更。細部に修正が加えられ、バーナビーのもち味である「クール&スタイリッシュ」を強調したデザインになっている。





CAST COMMENT キャストコメント
森田成一 MASAKAZU MORITA

回を重ねるごとにスタッフの意気込みをひしひしと感じる「タイバニ」シリーズ。なかでも『The Rising』はかなり挑戦的です。派手なアクションシーンだけでなく、人の心の機微を描いたドラマ性は、必見ですね!!

Scene 02

ライアン・ゴールドスミス

RYAN GOLDSMITH

ライアン・ゴールドスミス

海外での活躍が評価され、アポロンメディアの新オーナーであるマーク・シュナイダーの発案からシュテルンビルトに来た男。年齢はバーナビーよりも若いが、態度も口調も生意気そのもの。先輩ヒーローが相手でもその姿勢は変わらないが、それだけの実力は伴っている。

所属▶アポロンメディア
スポンサー▶BANPRESTO / TANITA / DARTSLIVE
NEXT能力▶一定範囲の重力を増幅させる

GOLDEN RYAN as RYAN GOLDSMITH

CAST COMMENT キャストコメント

中村悠一 YUICHI NAKAMURA

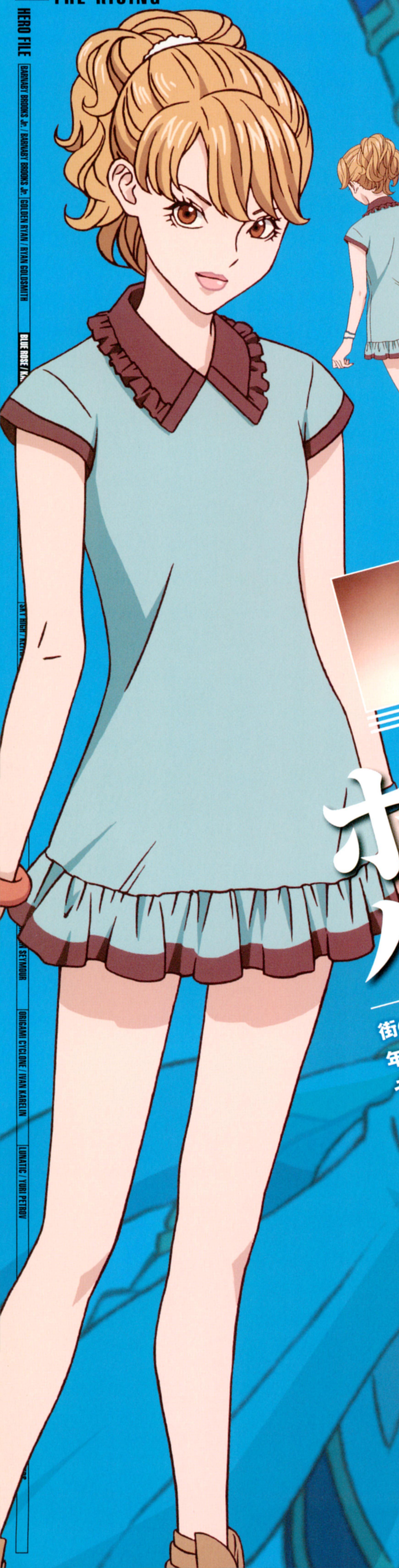
ファンの皆様からしたら、最高のコンビが解消されて新しいヒーローと組むことに不安を感じるかもしれません。でも大丈夫!! 演じた私が「最高です!!」と胸を張って言えるシナリオです。ライアンの活躍ともども、楽しんでください。

ゴールデンライアン

クールなバーナビーとは対照的に、湧き出るようなアグレッシブさがライアンの魅力。そんなライアンの豪快さを反映するかのように金色に輝く姿は存在感抜群である。さらに背中には1対の大きな翼が据えられ、翼を広げた様はアポロンメディアのシンボルであるグリフォンの姿を髣髴とさせる。

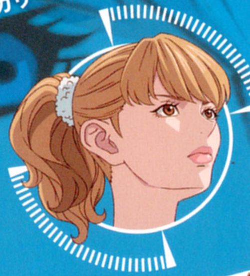
俺のブーツにキスをしな!!

新生アポロンメディアヒーロー事業のテコ入れ策として
電撃的に登場したバーナビーの新パートナー。
自信満々に「世界は俺の足もとにひれ伏す」と豪語するなど
その振る舞いは傲岸不遜に見えるほど。
「自分を中心とする一定範囲内の重力を増幅させる」という
NEXT能力をもつ。



カリーナ・ライル

ヒーローを演じているときにはクールな女王様キャラのカリーナ。何かと報われないヒーローという職業に疑問をもったこともあったが、「誰かに認められるためではなく、困っている人を助けたいからヒーローをやっている」という虎徹の想いに触れ、彼女なりにヒーローを続けることを決意した。そんなカリーナは、大切な仲間の危機にどう動くのか!?



所属▶タイタンインダストリー
スポンサー▶pepsi
NEXT能力▶氷を操る

ホント バカなんだから

街の平和を守るヒーローと夢にときめく女子高生。年頃の女の子にとって、この両立はなかなかタイヘン。それでもブルーローズは常にキューティーそのもの。それは「歌手になる」という夢を叶えるため そして「困っているみんなを助けたい」という想いのため――。

scene 03

カリーナ・ライル

KARINA LYLE

BLUE ROSE as KARINA LYLE

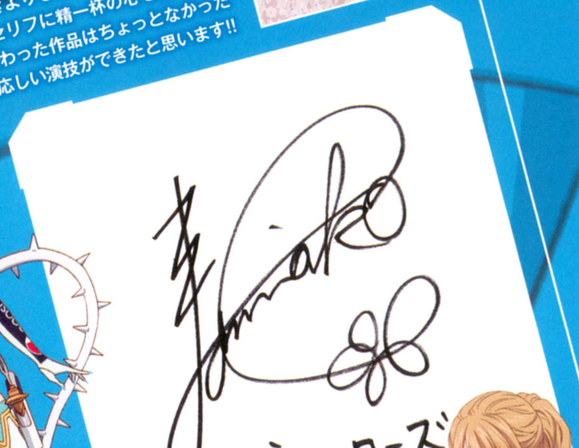
ブルーローズ

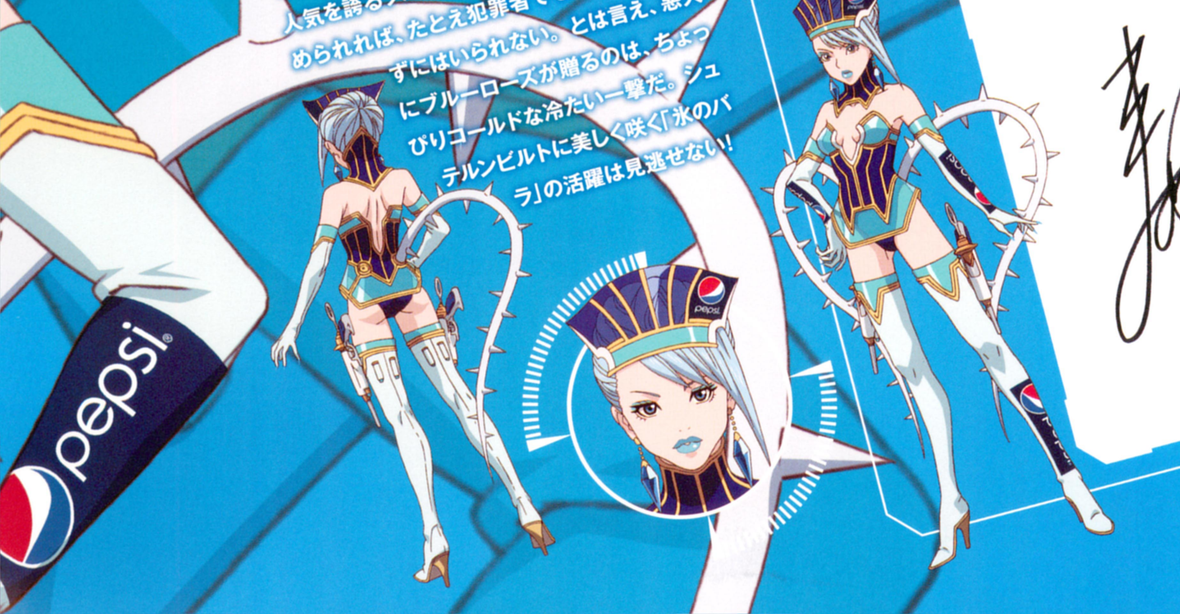
ヒーロー界のスーパーアイドルとして不変の人気を誇るブルーローズ。その眼差しに射止められれば、たとえ犯罪者でも心を動かされずにはいられない。とは言え、悪人にブルーローズが贈るのは、ちょっぴりコールドな冷たい一撃だ。シュテルンビルトに美しく咲く「氷のバラ」の活躍は見逃せない!

CAST COMMENT キャストコメント

寿 美菜子 MINAKO KOTOBUKI

『The Beginning』のときよりもヒーロー同士の距離感が近いので、仲間を想うセリフに精一杯の心を込めました。ここまでガッツリ関わった作品はちょっとなかっただけに、フィナーレに相応しい演技ができたと思います!!





Scene 04

アントニオ・ロペス

ANTONIO LOPEZ

ROCK BISON as ANTONIO LOPEZ

アントニオ・ロペス

虎徹とは学生時代からの腐れ縁で、普段から飲み歩くぐらい仲がよい。厳つい見た目とは裏腹に他人を気遣うことのできる気のいい好漢。「気は優しくて力持ち」とは、まさに彼のためにある言葉なのかもしれない。

所属▶クロノスフーズ
スポンサー▶すき家 日本太麺堂々
NEXT能力▶肉体硬化(頑強な皮膚)

ロックバイソン

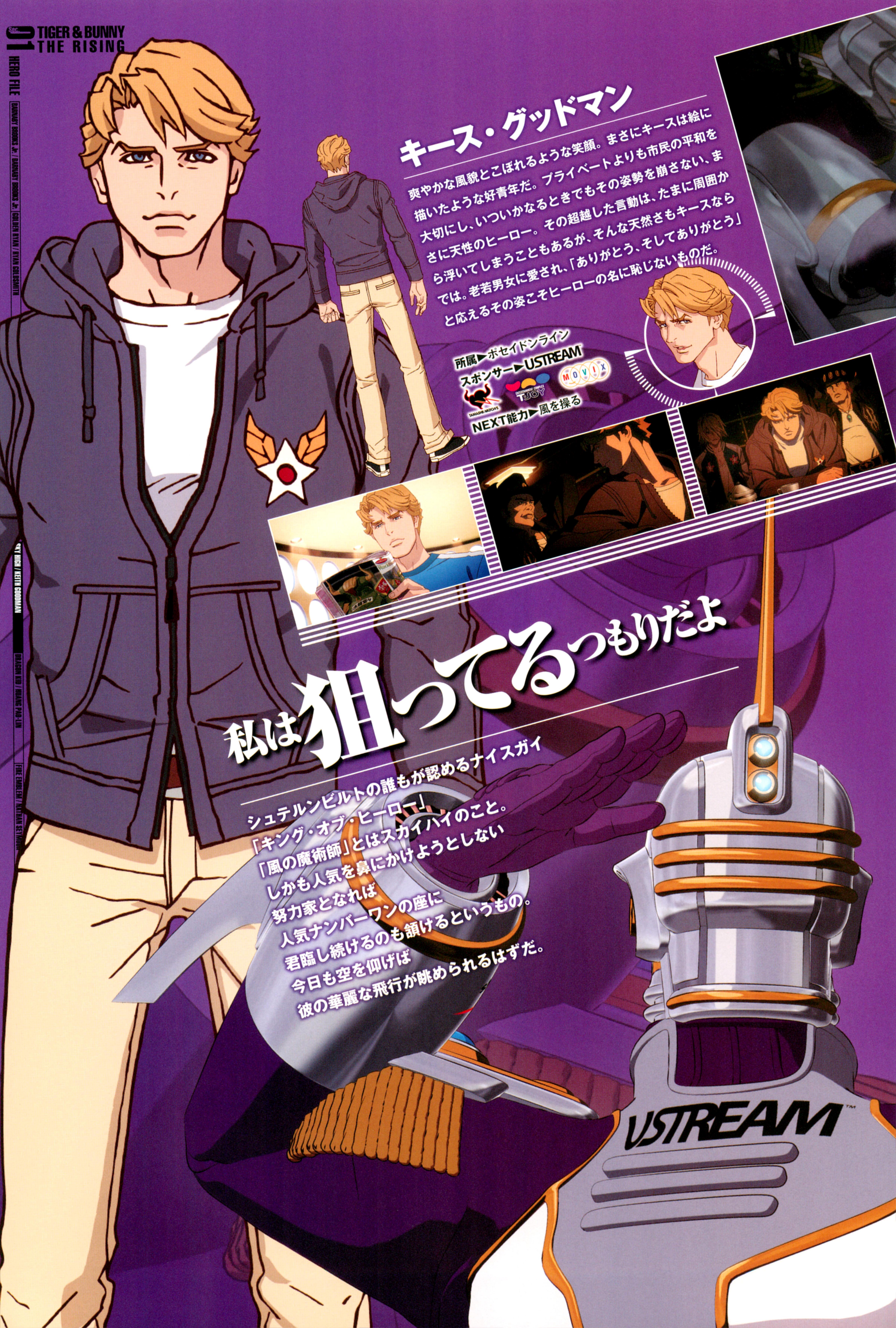
2本の角と肩のドリルは強さの証! 動きはやや鈍いものの、強靭な皮膚を硬化させ、走ってくるトラックを正面から受け止める豪快さは、ロックバイソンのもち味。もち前のパワーは犯罪者に立ち向かうだけでなく、瓦礫の撤去といった一見地味な作業でも如何なく発揮されるのだ。

キャストコメント CAST COMMENT
楠 大典 TAITEN KUSUNOKI

本編では自分の立ち位置に悩むロックバイソンですが、これは盟友・虎徹がいなくなったことが原因。誰にも相談できずに迷走する様子と、悩みから立ち直って猪突猛進する姿の対比をスクリーン上で楽しんでください!!

俺の心は相当ロック！
お前の悪事を完全ロック!!

彼の肉体は、シュテルンビルトを活躍の場とするヒーローのなかでも最強を誇る。
とは言え、ただそれだけでは務まらないのがヒーローの辛いところ。
街の平和を守ったうえで、自らの存在をアピールしてこそ
ヒーローの名に値する存在になれるのだ。
ベテランヒーローでありながら日々試行錯誤を繰り返しつつ
今日も彼はヒーロー街道を突き進む!!



キース・グッドマン

爽やかな風貌とこぼれるような笑顔。まさにキースは絵に描いたような好青年だ。プライベートよりも市民の平和を大切にし、いついかなるときでもその姿勢を崩さない、まさに天性のヒーロー。その超越した言動は、たまに周囲から浮いてしまうこともあるが、そんな天然さもキースならでは。老若男女に愛され、「ありがとう、そしてありがとう」と応えるその姿こそヒーローの名に恥じないものだ。

所属▶ポセイドンライン
スポンサー▶USTREAM
NEXT能力▶風を操る

私は狙ってるつもりだよ

シュテルンビルトの誰もが認めるナイスガイ
「キング・オブ・ヒーロー」
「風の魔術師」とはスカイハイのこと。
しかも人気を鼻にかけようとしない
努力家となれば
人気ナンバーワンの座に
君臨し続けるのも頷けるというもの。
今日も空を仰げば
彼の華麗な飛行が眺められるはずだ。

scene 05

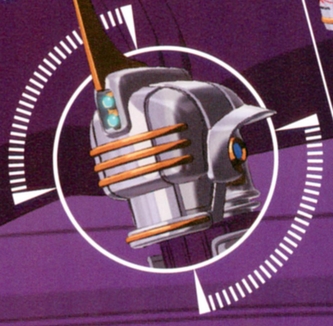
キース・グッドマン

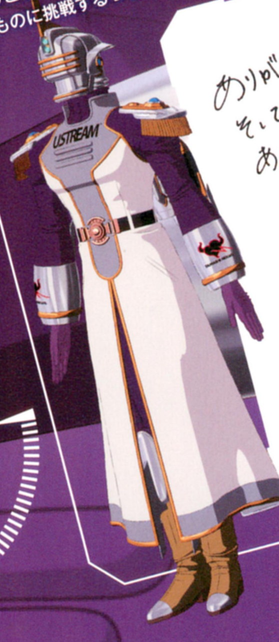
KEITH GOODMAN

SKY HIGH as KEITH GOODMAN

スカイハイ

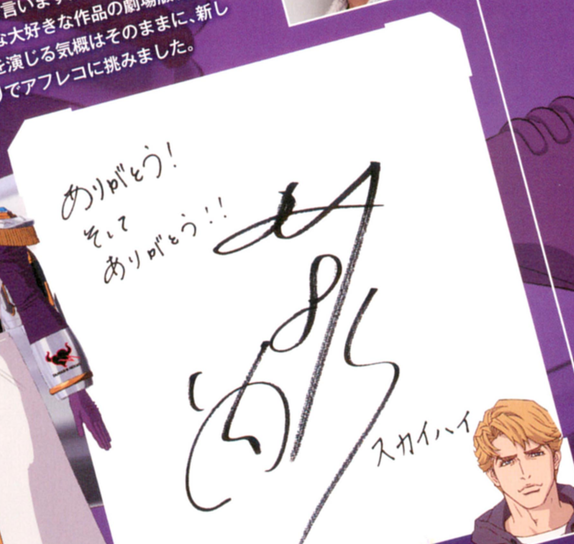
風を操るNEXT能力と、背中に配した2基のジェットパックによって驚異的な加速性能で大空を華麗に舞い、ビルの谷間を駆け抜けるスカイハイ。さらに両腕から生み出した風は標的を吹き飛ばしたり、落下する物体を支えたりと、千変万化の活躍をする。空の高みからシュテルンビルトを見守り、事件があればいち早く現場に駆けつける——こうしてスカイハイは常に街の平和に尽くしているのだ。





CAST COMMENT キャストコメント 井上 剛 GO INOUE

いまだからこそ大きな声で言いますが、僕は「タイバニ」が大好きなんです!! そんな大好きな作品の劇場版新作ということで、スカイハイを演じる気概はそのままに、新しいものに挑戦するつもりでアフレコに挑みました。



Scene 06

ホァン・パオリン［黄宝鈴］

HUANG PAO-LIN

ホァン・パオリン［黄宝鈴］

幼少時から武術や格闘技を学び、最年少ヒーローとしてシュテルンビルトで活躍するパオリン。若いながらも親もとを離れて頑張る姿は健気でもある。「ボク」という一人称や短髪の外見からボーイッシュさが特徴だが、時折見せる何気ない素振りに可愛らしさが見え隠れしている。

所属▶オデュッセウスコミュニケーション
スポンサー▶DAM Calbee
NEXT能力▶雷を操る

ドラゴンキッド

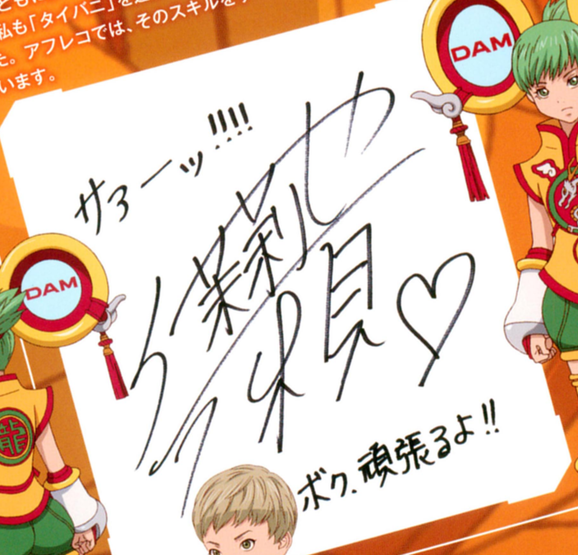
華麗なカンフー技を駆使し、身の丈以上の棍棒を振りまわし、立ちはだかる犯罪者を組み伏せる彼女の姿は圧巻!! さらに電撃を発するNEXT能力は、未知数の可能性を秘めており、日々トレーニングを積むその姿には、ヒーローのなかでも一番小柄とは言え、これからに期待大だ。

DRAGON KID as HUANG PAO-LIN

CAST COMMENT キャストコメント

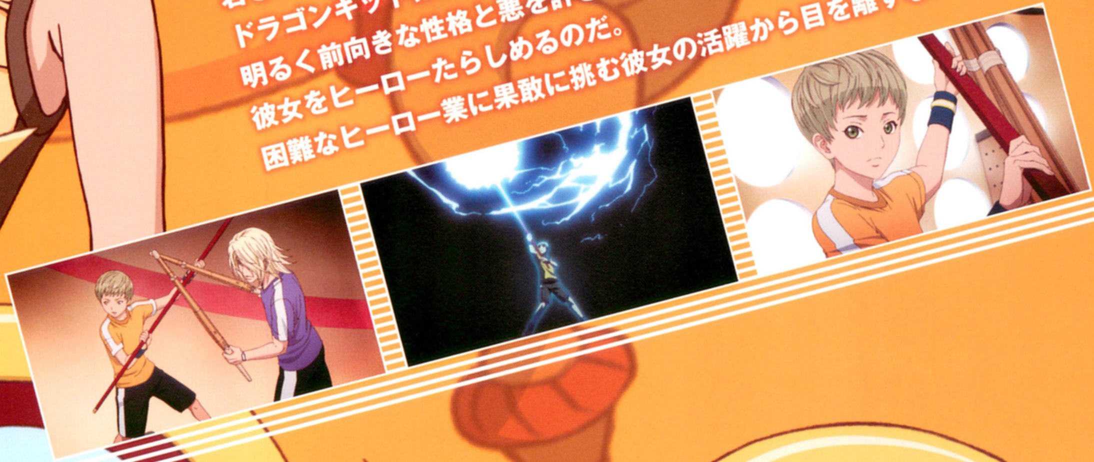
伊瀬茉莉也 MARIYA ISE

私にとって「タイバニ」シリーズはまさに宝物です。これまでともに歩んできたドラゴンキッドが成長したように、私も「タイバニ」を通じて新たなスキルが身につきました。アフレコでは、そのスキルをすべてぶつけて挑んでいます。



ファイヤーさんを悪く言うな!!

若さとは、これからの未来が開けているということ。
ドラゴンキッドは日々成長し続ける。
明るく前向きな性格と悪を許さない強い正義感が
彼女をヒーローたらしめるのだ。
困難なヒーロー業に果敢に挑む彼女の活躍から目を離すな!!



Scene 07

ネイサン・シーモア

NATHAN SEYMOUR

ネイサン・シーモア

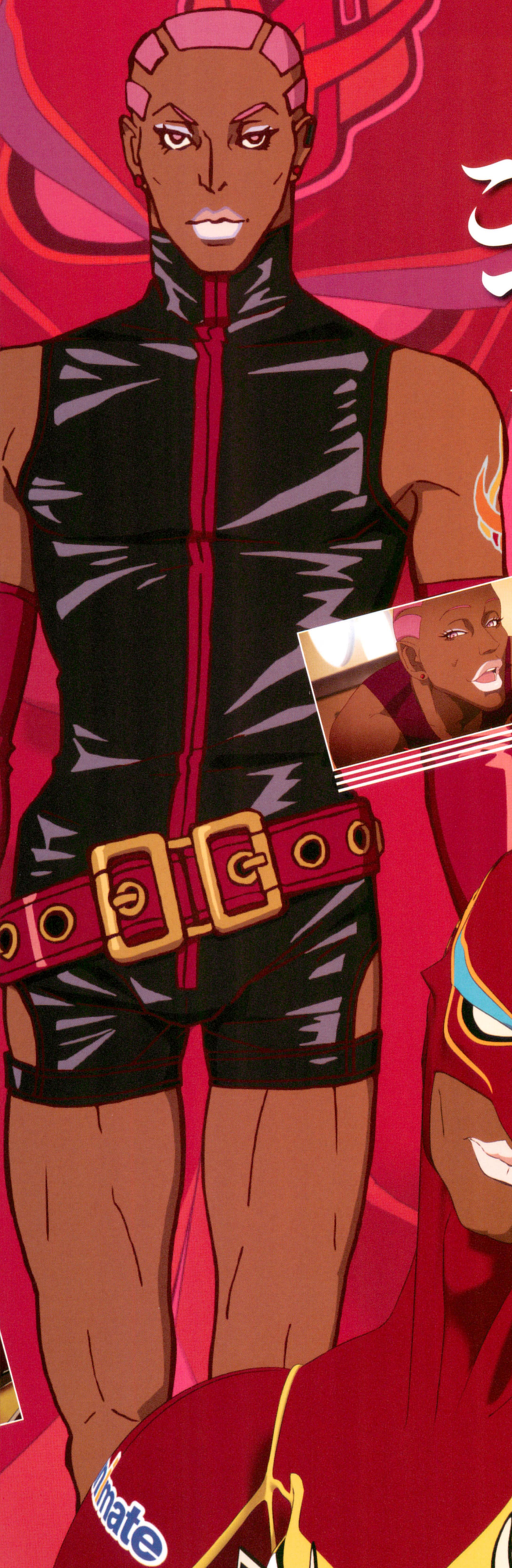
シュテルンビルト7大企業のひとつ、ヘリオスエナジーのオーナーであるネイサンは、男性でありながら乙女の心をもった異色のヒーローである。

所属▶ヘリオスエナジー
スポンサー▶animate Domino's
NEXT能力▶火を操る

FIRE EMBLEM as NATHAN SEYMOUR

キャストコメント CAST COMMENT
津田 健次郎 KENJIRO TSUDA

脚本の西田さんが「次はネイサンが活躍します!!」と宣言していたのでワクワクしていたら、実際には予想を遥かにうわまわる活躍ぶりでした。このような形で、もう1度ネイサンを演じられることが「ファイヤー嬉しい」です!!

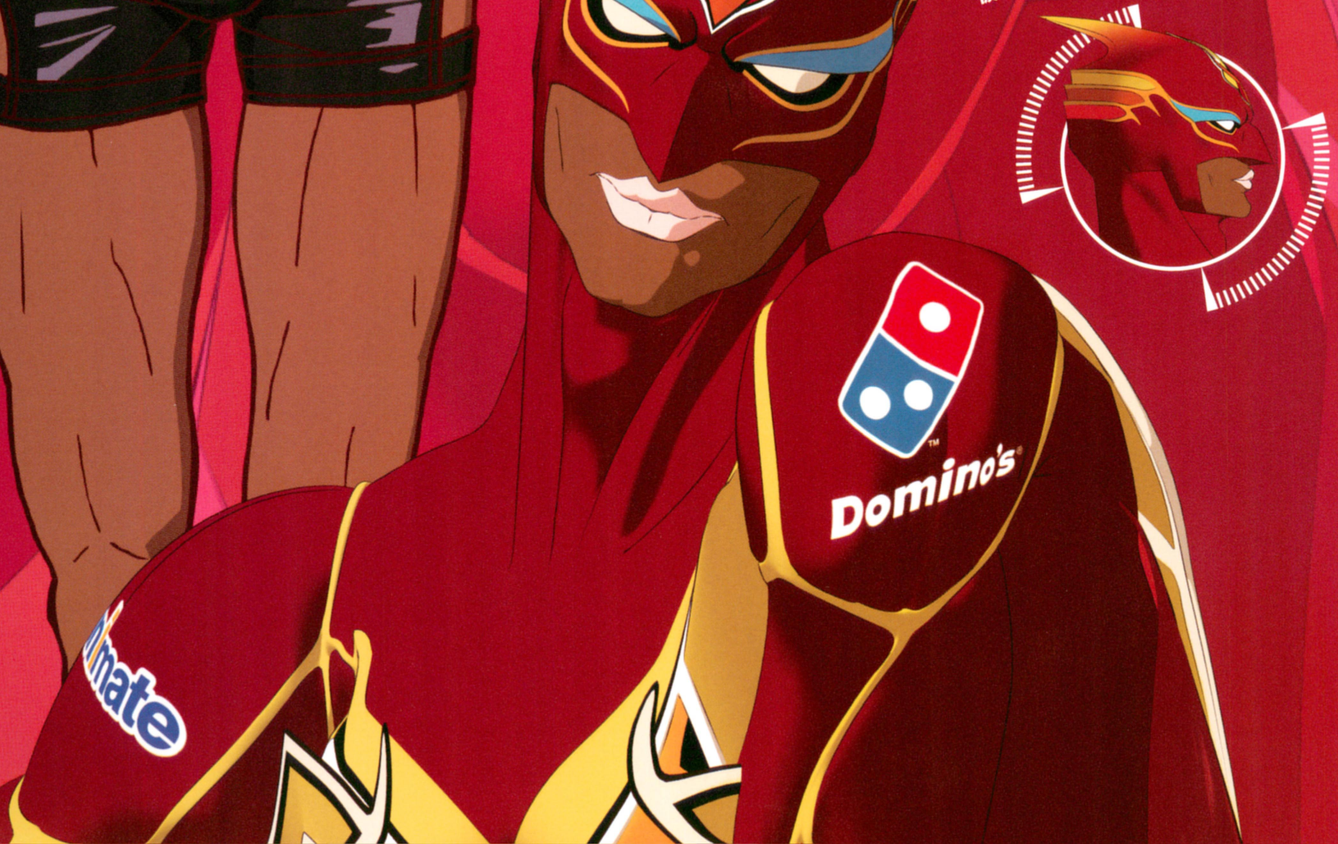


これでいいのよ アタシはアタシ

妖艶なオネエ言葉と鋼の肉体という、相反する特徴を併せもったヒーロー。ややエキセントリックな部分が際立つファイヤーエンブレムだが心のなかは誰よりも温かな思い遣りで満ち溢れている。オトコとオンナ——どちらの気持ちも理解できることからヒーローたちのまとめ役になることも。

ファイヤーエンブレム

肉感的なボディーラインを強調したスーツと舞い踊る炎をあしらったマントを纏うファイヤーエンブレムの姿には、シンプルさと派手さが共存している。事件の際には悪人に対しNEXT能力による情熱的なお仕置きを喰らわせるが、普段のネイサンはヒーローたちのまとめ役として皆に安心感を与えてくれる。“相反するものを共存させられる”ことが、彼（彼女？）の最大の能力なのかもしれない。



イワン・カレリン

バーナビーと同じくヒーローアカデミー出身だが、後ろ向きな性格に加え、自分のNEXT能力に自信がもてなかったことから、その実力を発揮し切れずにいた。そんなイワンが自分のあるべき姿について強く意識し始めたのは親友エドワードとの再会を経てから。「見切れ」以外に大切なことを見つけ、自分なりのヒーローを模索中の彼の活躍から目が離せない。

所属▶ヘリペリデスファイナンス
スポンサー▶大江戸温泉物語 DMM.com ナンジャタウン BANDAI VISUAL CLUB
NEXT能力▶擬態

拙者は仲間を置いて逃げたりしないでござる!

当初は、スポンサーロゴをアピールするためカメラアングルを意識して絶妙なタイミングで映り込むことばかりに躍起になっていた「見切れ職人」。とは言え、「見切れ」だけでは終わらない。これからの折紙サイクロンはひと味違うのだ!!

scene 08

イワン・カレリン

IVAN KARELIN

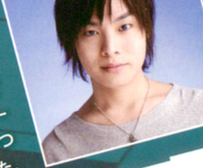
ORIGAMI CYCLONE as IVAN KARELIN

折紙サイクロン

「和の心」をこよなく愛するイワンの趣味を反映した折紙サイクロンのヒーロースーツはニンジャがモチーフ。隈取り模様のお面に下駄履きスタイル、しかも腰には2本の刀、背中には巨大な手裏剣という、見た目はもっとも奇抜なヒーローだ。その出で立ちと、スポンサーロゴのアピールのみに燃えていたことから"キワモノ"的な扱いをされてきたが、ヒーローとしての在り方に目覚めたイワンのこと、能力を活かした大捕物を見せてくれる日も近いだろう。

CAST COMMENT キャストコメント

岡本信彦 NOBUHIKO OKAMOTO



前作では活躍の機会がなかった折紙ですが、今回はやってくれています!! 仲間のために役に立つだけでなく、ヒーローとしてのオイシイ部分もキチンと描かれていて、「いつものイワンじゃ終わらない」というのが嬉しい限りでした。

Scene 09

ユーリ・ペトロフ

ユーリ・ペトロフ

宵闇に紛れてシュテルンビルトの悪を裁くルナティックの昼の顔は、司法局ヒーロー管理官兼裁判官のユーリ・ペトロフだ。普段の彼は沈着冷静な人格者だが、法の執行者という立場からシュテルンビルトの現状を眺めるユーリの目にヒーローの姿はどのように映っているのか？ 純粋なまでに悪を憎み、罪には相応の咎を――その衝動から、今日も彼は狂気の装束を身に纏う。

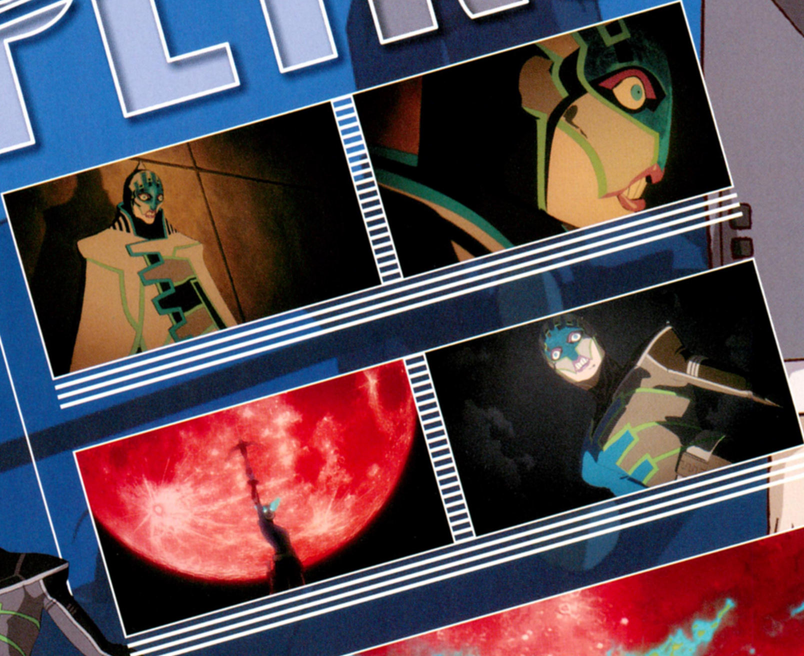
NEXT能力▶青い焔を操る

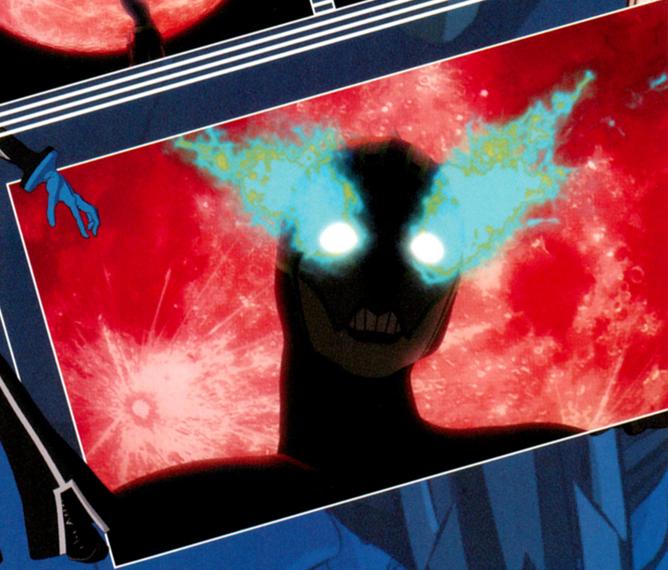
YURI PETROV

LUNATIC as YURI PETROV

CAST COMMENT キャストコメント 遊佐浩二 KOJI YUSA

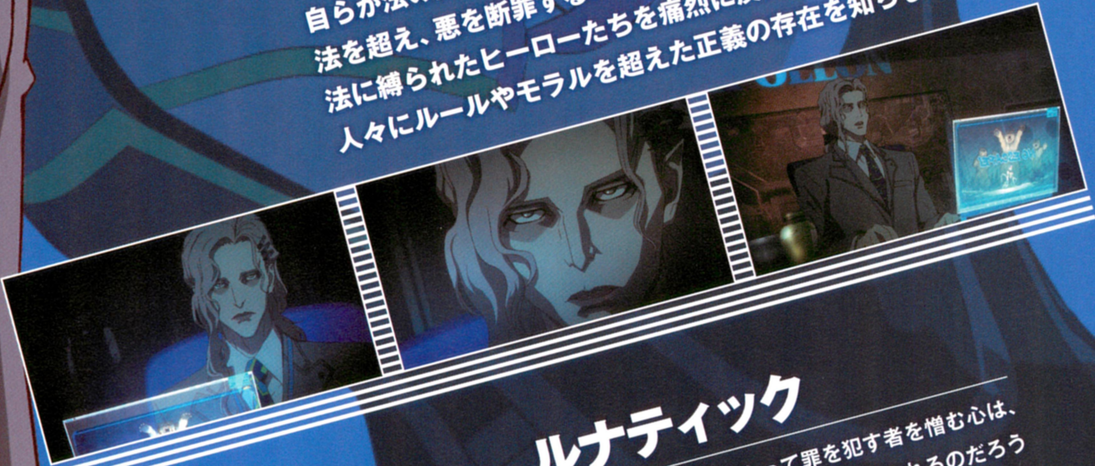
凶悪事件を前にして、あくまで自分が信じる正義を貫く虎徹と悪の断罪に固執するルナティックのせめぎあいが『The Rising』の見どころです。つくり手側の熱意が存分に込められたシーンの連続に、僕も挑戦心を掻き立てられました。





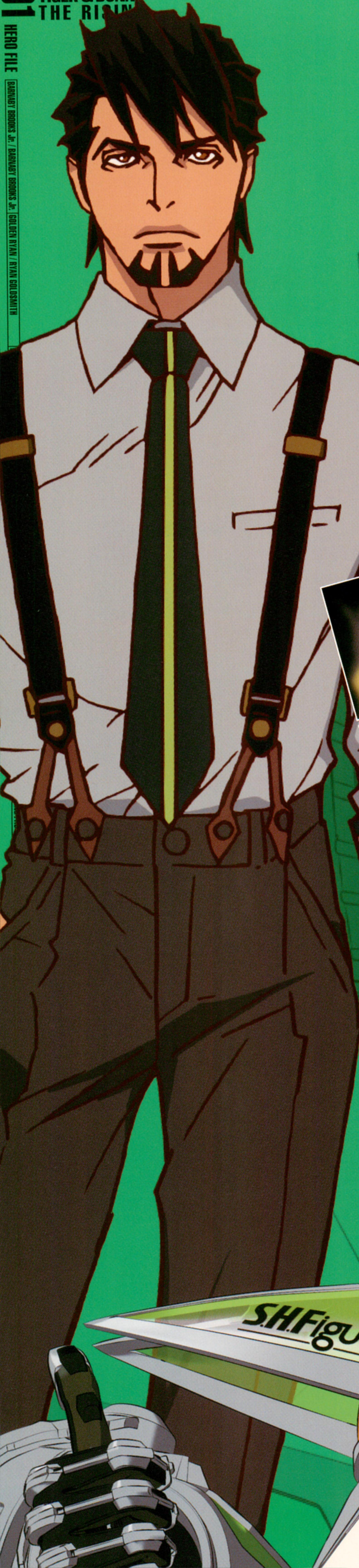
私は私の正義で動く

法で裁けない悪に対し、燃え盛る焔で冷徹な刑を与えるのは
自らが法の限界を知る、法の執行者であるがゆえか――。
法を超え、悪を断罪するルナティックの姿は
法に縛られたヒーローたちを痛烈に皮肉り
人々にルールやモラルを超えた正義の存在を知らしめる。



ルナティック

「青い焔を操る」力をもって罪を犯す者を憎む心は、やがてはその罪を裁けぬ者にも向けられるのだろうか。一見無表情に見えるルナティックのマスクが見据えるものとは……。「殺人者は死をもって償うべし」という独自の正義を貫くルナティックが、ヒーローたちの掲げる正義と交わることはないのか？



鏑木・T・虎徹

正義を愛する心とは裏腹に、自らの能力が減退している崖っぷちの元・人気ヒーロー。マーベリックを巡る事件が解決してから1度は引退したものの、それでもヒーローとしての情熱だけは衰えを知らず、「ワイルドタイガー・ワンミニット」として2部リーグ復帰。市民の安全を守るため、事件解決に奔走する日々を送っていた。

所属▶アポロンメディア（2部リーグ）
スポンサー▶SoftBank、S.H.Figuarts、LOTTE
NEXT能力▶ハンドレッドパワー

そろそろ別の道を進むのも悪くねえんじゃねえのか

NEXT能力の減退もあり一時引退したが、ヒーローへの熱い想いから
2部リーグに復帰し、シュテルンビルトの
平和を守ってきたワイルドタイガー。
ところが相棒のバーナビーに
1部リーグ復帰の話がもちあがり
コンビ解消という事態に直面する。
サラリーマンヒーローとしての現実に
複雑な想いを胸に抱えながら
彼が選択した道とは……!?

scene 10

鏑木・T・虎徹

KOTETSU T. KABURAGI

WILD TIGER
KOTETSU T. KABURAGI

ワイルドタイガー

引き続きアポロンメディアに所属しているものの、2部リーグでは整備やバックアップがやや不十分なようで、自慢のヒーロースーツもあちこちに汚れが目立ってきていた。だがシュテルンビルトと仲間たちの危機を前にして、暫定的に1部リーグに復帰。新生スーツ「Style 2」を身につける。生まれ変わったワイルドタイガーは、果たしてどのような活躍を見せてくれるのか!?

CAST COMMENT キャストコメント
平田広明 HIROAKI HIRATA

能力の衰えを自覚しながらも不器用かつ懸命に活躍する虎徹の背中に、ヒーローとして生きる彼の想いを精一杯込めました。派手なアクションシーンがありながら、胸を打つシーンも盛りだくさんです。どうぞご期待ください。

鏑木 楓
KAEDE KABURAGI
cv. 日高 里菜
虎徹のひとり娘。ヒーローとして街の平和を守る父親を応援している。
鏑木 村正
MURAMASA KABURAGI
cv. 田中 正彦
虎徹の兄で、バーカウンター併設の酒屋「鏑木酒店」の経営者。虎徹とは違い寡黙だが、彼の気持ちを理解してくれる相談相手でもある。
鏑木 安寿
ANJYU KABURAGI
cv. 定岡 小百合
虎徹の実母であり、楓の祖母。虎徹に対する小言も多いが、危険と隣りあわせのヒーロー稼業に勤しむ虎徹の身を案じている。
リチャード・マックス
RICHARD MAX
cv. 小山 力也
突如、シュテルンビルトに出現した謎のNEXTのひとり。
カーシャ・グラハム
KASHA GRAHAM
cv. 水樹 奈々
謎のNEXTの紅一点。
アニエス・ジュベール
AGNES JOUBERT
cv. 甲斐田 裕子
「HERO TV」の女性敏腕プロデューサー。番組の視聴率をあげることを第一としており、常にスリリングな映像を追い求めている。
ケイン
CAIN
cv. 勝沼 紀義
「HERO TV」のディレクター。本来ならば番組制作を取り仕切る立場にあるものの、アニエスの無茶な指示には頭があがらない。
メアリー
MARY
cv. ふしだ 里穂
「HERO TV」でスイッチャーを務める女性スタッフ。現場から送られてきたヒーローたちの画像を巧みに切り換える役を果たしている。
マリオ
MARIO
cv. 太田 真一郎
「HERO TV」の実況担当。カメラマンとともに事件現場にいち早く駆けつけ、ヒーローたちの活躍ぶりを市民に向けて実況中継する。
ジョニー・ウォン
JOHNNY WONG
cv. 麦人
謎のNEXTのひとり。

OTHER CHARACTERS

マーク・シュナイダー
MARK SCHNEIDER
cv. 大塚 芳忠

若くして起業し、大成功を収めたカリスマ実業家。経営立て直しを図る「アポロンメディア」の新オーナーとなった。

ヴィルギル・ディングフェルダー
VIRGIL DINGFELDER
cv. 平川 大輔

シュナイダーの秘書。上司の命令を至上とし、理不尽な業務も的確にこなす。

アレキサンダー・ロイズ
ALEXANDER LLOYDS
cv. 横島 亘

アポロンメディア ヒーロー事業部所属の虎徹とバーナビーの上司。

ベン・ジャクソン
BEN JACKSON
cv. 宝亀 克寿

元「トップマグ」ヒーロー事業部長で、虎徹の上司だった。マーベリック事件終結後はアポロンメディアに再就職した。

斎藤さん
SAITO
cv. 岩崎 ひろし

アポロンメディアに所属する技術者で、ヒーロースーツ開発担当。腕はいい反面、コミュニケーション能力にやや難がある。

ステルスソルジャー
STEALTH SOLDIER
cv. 白熊 寛嗣

元ヒーロー。引退してからはテレビコメンテーターに転身し、現役ヒーローの活躍を解説している。

ボンベマン
BOMBE MAN
cv. 林 勇

背中にボンベを装着した2部リーグに所属するヒーロー。

Ms. バイオレット
MS. VIOLET
cv. 冠野 智美

紫色のヒーロースーツに身を包む2部リーグに所属する女性ヒーロー。

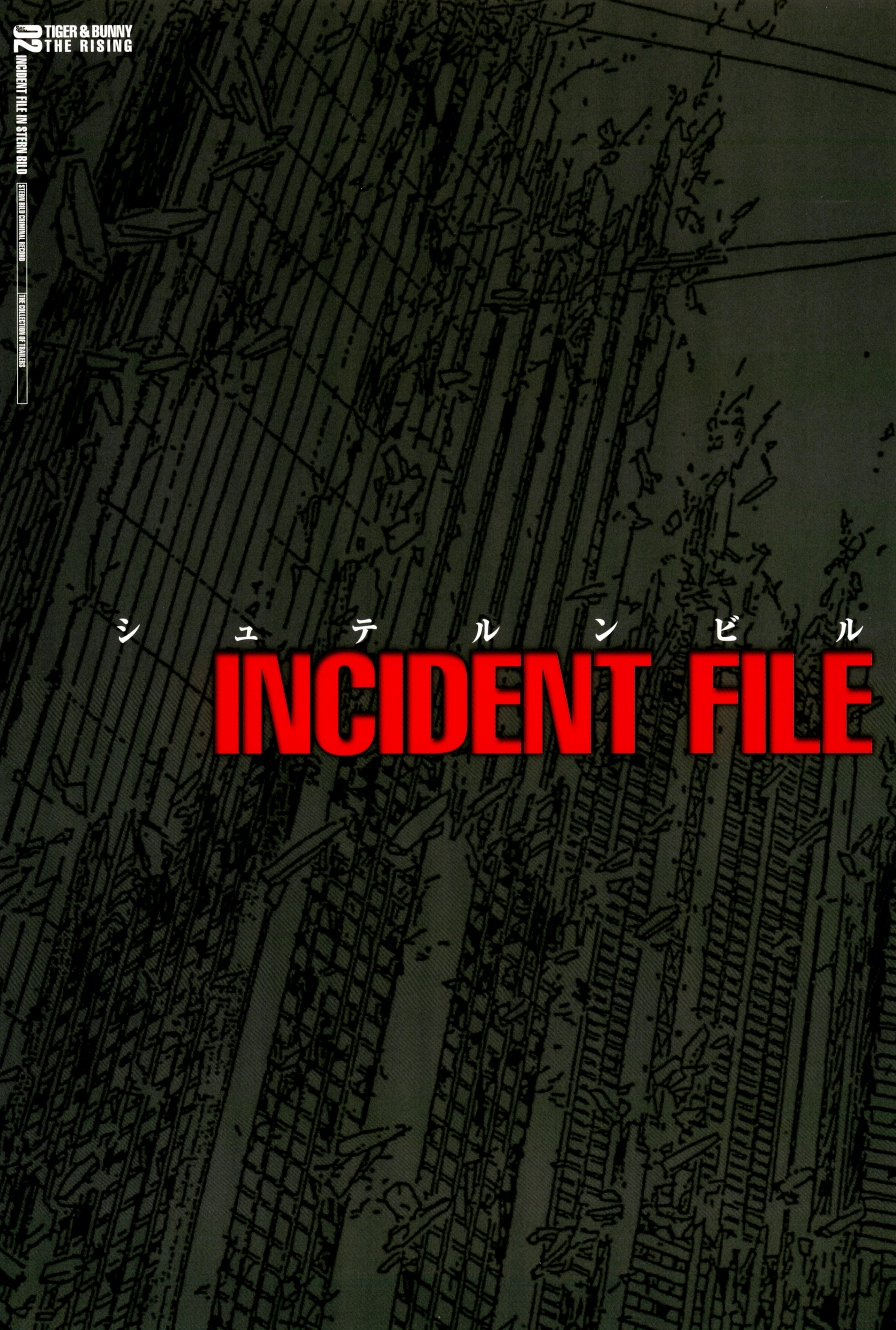
スモウサンダー
SUMO THUNDER
cv. 宮本 崇弘

大柄な体格と独自のヒーロースーツが力士を思わせる2部リーグのヒーロー。

チョップマン
CHOP MAN
cv. 関 雄

流線型のマスクと細身のボディーが特徴の2部リーグのヒーロー。

シュテルンビル
INCIDENT FILE



人々の生活の場である巨大都市シュテルンビルトでは
昼夜を問わずに事件・事故が発生しているが
大企業を代表するヒーローたちによって平安が保たれていた。
そんなヒーローたちのこれまでの奮闘の歴史を振り返ってみよう。

ト事件ファイル

IN STERN BILD

シュテルンビルト事件記録

NEXT能力をもつヒーローたちに守られる街、シュテルンビルト。彼らの活躍は「HERO TV」によって中継され、市民たちも彼らの行動を身近に感じて応援することができるのだ。ここでは、脅威のルーキー、バーナビー・ブルックスJr.の加入以後に起こったシュテルンビルトの主な事件を振り返ってみたい。

■事件名　Incident name

スティールハンマー像　暴走事件

■被疑者名　Suspect's name

トニー　[NEXT能力：石像を動かす]

■事件概要　Incident summary

シュテルンビルト工業地区のシンボルであるスティールハンマー像が動き出す事件が発生。当局の展開した封鎖網を易々と突破し、市街地に接近した。これはNEXT能力に目覚めたことでいじめにあっていたトニー少年が関与していることが判明。さらにその動機が、普段からNEXTに偏見をもっている級友アイザックへの仕返しであることがわかり、ヒーローたちは制止を試みる。一旦は、巨像は停止するものの、トニー少年は次に市の文化遺産であるライオン像を動かし、アイザックが出場するフィギュアスケートのコンテスト会場を襲撃した。

■結果　Result

ワイルドタイガーの説得を聞き入れたトニー少年が自らの非を悔いて出頭。その直後、半壊したスケートリンクが倒壊の危機に陥る一幕があったが、ヒーローたちと再度スティールハンマー像を動かしたトニー少年の協力もあって、大事には至らなかった。

Stern bild Criminal record

■事件名　Incident name

スタチュー・オブ・ジャスティス盗難事件

■被疑者名　Suspect's name

ロビン・バクスター　[NEXT能力：所在転換(視界内にいる自分と他人の場所を入れ替える)]

■事件概要　Incident summary

かつて、Mr.レジェンドが凶悪犯から取り戻した、シュテルンビルトの平和のシンボルであるスタチュー・オブ・ジャスティスの盗難事件が発生。犯人は、インラインスケートのスーツに身を包みNEXT能力を駆使して世界各地で盗難事件を起こしていたロビン・バクスターである。幹線道路を疾走し、追っ手を振り切るために遊園地へと逃げ込んだ犯人。ヒーローたちは自身の能力を駆使して逆に追い詰めるべく遊園地の外へロビンを逃がさないよう行動する。しかしロビンの使う所在転換能力に翻弄されてしまい、なかなか確保することができずに苦戦することに。そんななか、バーナビー・ブルックス Jr.が活躍し、ロビン確保とスタチュー・オブ・ジャスティス奪還に貢献した。

■結果　Result

ジェットコースターのレールを利用して遊園地の外への逃亡を図ったロビンだったが、バーナビー・ブルックス Jr.がヒーロースーツを囮に使って自分のいる位置を見誤らせる作戦を展開。自分の能力を過信したロビンを確保することに成功。スタチュー・オブ・ジャスティスも無事取り返した。

●主な被害
✓一部の遊園地施設の破損

■特記事項　Notice

ロビンのNEXT能力を逆手に取り、頭
プレーによって見事に確保に成功した
ーナビー・ブルックス Jr.。その単独で
活躍は「HERO TV」で中継された。

Stern bild Criminal record

■事件名　Incident name

サマンサ・テイラー殺害事件

■被疑者名　Suspect's name

鏑木・T・虎徹?　[NEXT能力：?]

■事件概要　Incident summary

バーナビー・ブルックス Jr.が幼い頃、ブルックス家の家政婦として彼の面倒も見ていたサマンサ・テイラー。21年前に起こったバーナビー両親殺害事件の手がかりである写真を見つけ、アポロンメディアに訪ねてくるがその後の足取りは不明となる。ときを同じくして記憶の混濁が始まっていたバーナビー・ブルックス Jr.も所在不明に。足取りを追うワイルドタイガーこと鏑木・T・虎徹は、サマンサ邸に向かうも会うことは叶わなかった。翌日会社に戻った虎徹を待ち構えていたのはサマンサ・テイラーが殺害され、その犯人が自分だというニュースだった。身に覚えのない罪状で指名手配された虎徹は無実を証明するため真犯人を追うが……。

■結果　Result

アルバート・マーベリックの記憶操作能力によって、ワイルドタイガー＝虎徹の記憶を失くしたヒーローたちに追い詰められる虎徹。最大のピンチに駆けつけたのは、虎徹の娘である楓だった。楓もNEXT能力者でその能力は「触れた相手のNEXT能力をコピーする」というもの。奇しくもアルバート・マーベリックに触れられていた楓は、その能力をコピーしており、ヒーローたちの記憶をよみがえらせる。殺人犯の濡れ衣は解かれたのだった。

■特記事項　Notices

他のヒーローたちの記憶は戻ったものの、操られたままのバーナビー・ブルックス Jr.はサマンサを殺された怒りを募らせ、一方的にワイルドタイガーを追い詰める。なかなか記憶が戻らなかったが、ワイルドタイガーの発した「バニーちゃん」という言葉がきっかけとなり、バーナビー・ブルックス Jr.の記憶は戻った。

■チェックポイント　Producer's comment

バーナビー・ブルックス Jr.の両親殺害事件、そしてサマンサ・テ
ラー殺人に関わっていたのは、恩人だと思っていたアルバート・
ーベリックその人だった。「HERO TV」の視聴率をあげるために
罪組織と手を組み、犯人逮捕劇を盛りあげていたことをバーナビ
の両親に知られたために殺害。現場を目撃していた幼いバーナビ
の記憶をも操っていたのだった。

Stern bild Criminal record

Producer's comment
■チェックポイント
ーナビー・ブルックス Jr.が単独ロビンを捕まえることに、他のヒーローたちは反対。だがワイルドタガーは彼の決意を信じ、自分が守り、何かあれば自らが責任を取とヒーローたちを説得。その判は正しく、最後にはバーナビー・ルックス Jr.は自身の作戦にってロビンの確保に成功した。

■事件名 Incident name
ヘラクレスの涙強奪事件

■被疑者名 Suspect's name
ポーリー
［NEXT能力：身体をダイヤモンドで包む］

■事件概要 Incident summary
シュテルンビルト中央博物館で公開された、時価600万シュテルンビルトドルの価値をもつ「ヘラクレスの涙」と呼ばれるダイヤモンド。その「ヘラクレスの涙」が何者かによって奪われる事件が発生する。犯行を行ったのは、体表をダイヤモンドのように硬質化できるNEXT能力者・ポーリー率いる窃盗団。逃走中の窃盗団を発見したバーナビー・ブルックス Jr.とワイルドタイガーが追跡し、確保を試みるが全身をダイヤモンドに覆われたポーリーの身体にはまったく歯が立たず、思わぬピンチに陥ってしまう。しかし最終的にふたりのコンビプレイが功を奏し、宝石奪還に成功したのだった。

■結果 Result
バーナビー・ブルックス Jr.とワイルドタイガーのそれぞれのハンドレッドパワーをもってしても、ポーリーには通用しなかった。ふたりの能力が切れる直前に同時に「GOOD LUCK MODE」が起動。息のあった連携プレーによって、ポーリーの全身を覆っていたダイヤを打ち砕くことに成功。見事にポーリーを確保し、ヘラクレスの涙を取り戻すことができた。

●主な被害
- ✓中央博物館備品の破損
- ✓一部交通機関のマヒ

■特記事項 Notices
「GOOD LUCK MODE」はスーツの一部が巨大化するため、スーツの威力自体がパワーアップしたように見えるが、実際は見た目が変化するだけで攻撃力が高まるわけではない。ポーリーを確保できたのは、ふたりの息があったことによるものだ。

■チェックポイント Producer's comment
事件当日はバーナビー・ブルックス Jr.の誕生日であったため、ヒーローたちはバースデーサプライズを用意していたが、いくつかの行き違いでサプライズ自体は失敗に終わる。しかし、ワイルドタイガーは、犯人確保の手柄をバーナビー・ブルックス Jr.にプレゼントした。

Stern bild Criminal record

■事件名 Incident name
犯罪者アジト一斉検挙作戦

■被疑者名 Suspect's name
ルナティック
［NEXT能力：青い焔を操る］

■事件概要 Incident summary
警察の捜査によって、組織的な犯罪者たちのアジトが判明した。工業地帯近くにある古い教会に隠れていることを知ったヒーローたちが、建物のまわりを包囲して、一斉検挙を行う作戦を展開する。「HERO TV」もこの様子を中継するために現地に待機。いよいよヒーローたちが連携する検挙作戦が開始されようとしたそのとき、青い焔を操る謎のNEXTが姿をあらわす。以前、テロリストが引き起こした「パワードスーツ襲撃事件」のときと同じように青い焔を次々と放つ謎のNEXTによって、一斉検挙は失敗に終わってしまった。

Stern bild Criminal record

■結果 Result
「ルナティック」と名乗る謎のNEXTによって、犯罪組織はたったひとりの生存者を残して完全に壊滅。ルナティックをバーナビー・ブルックス Jr.とワイルドタイガーが追跡し、追い詰めたものの確保することはできずに取り逃がしてしまう。ルナティックは、独自の理由で行動しているようだが、その詳細は不明のままだ。

■チェックポイント Producer's comment
犯罪者を容赦なく、次々と殺害していく謎のNEXTルナティック。追い詰めたワイルドタイガーに対して「この世の闇を切り裂くために私はまたあらわれる」との言葉を残して立ち去っていった。ルナティックの言葉からすると、再び相見える日も近いようだが……？

■事件名 Incident name
ヒーロー監禁事件

■事件概要 Incident summary
アルバート・マーベリックはNEXT能力を凌駕するアンドロイドを作成したロトワングと手を組んでおり、完成した戦闘用アンドロイドH-01を使ってワイルドタイガーとバーナビー・ブルックス Jr.以外のヒーローと楓が拉致監禁されてしまう。ヒーローたちは爆弾が仕組まれた首輪をつけられ、ジャスティスタワー内に囚われており、ワイルドタイガーとバーナビー・ブルックス Jr.は救出に向かう。しかし完成形となったH-01の戦闘能力は圧倒的であり、ハンドレッドパワーを発揮したふたりの力をもってしても寄せつけなかった。

Stern bild Criminal record

■結果 Result
追い詰められたふたりだが、ワイルドタイガーがH-01の背部にまわり、羽交い締めにすることに成功。「直前で逃げるから撃て」とバーナビー・ブルックス Jr.にビームライフルで攻撃することを指示し、何とか撃破に成功する。しかしワイルドタイガーは能力が切れていたため、重傷を負ってしまっていた。ブルーローズの能力をコピーした楓の活躍でヒーローたちは脱出に成功したものの、アルバート・マーベリックが引き連れた10体のH-01が待ち受ける。圧倒的な力に苦戦を強いられるヒーローたちだったが、斎藤さんがセーフティモードのパスワードを解析し、どうにかH-01の行動は停止したのだった。

■特記事項 Notices
アニエス・ジュベールによって悪事が天下のもとに晒されたアルバート・マーベリックは、楓を人質にとって逃走を図ろうとする。それを阻止したのは死んだと思われていたワイルドタイガーだった。アルバート・マーベリックはウロボロスの正体を明かさないまま、自らのNEXT能力で自分の記憶を封印したが、後に犯罪者を見逃さないルナティックに粛正されている。

■チェックポイント Producer's comment
この事件後、自分の能力減退を理由にワイルドタイガーはヒーローから引退。さらに、バーナビー・ブルックス Jr.もマーベリックに仕組まれて始めたヒーローを辞める。1年後、2部リーグの一員としてワイルドタイガーは復活。気持ちの整理のつかなかったバーナビーは両親のお墓参りに訪れたとき、セーフティモードのパスワードの意味がわかり、両親の想いを受け止める。そして、ふたりはヒーローとして再びコンビを結成する――。

第1話_予告

どうも！　TIGER & BUNNYの
ヒゲの方、虎徹です！

おっと、石像が暴れだしてるぞ。
犯人はNEXTか!?

次回、TIGER & BUNNY
あ、ぐっど、びぎ、に…ん…ぐ…
読めねぇよ！

第2話_予告

ハーイ、TIGER & BUNNYのメガネの方、
バーナビーです。

ちょっと！　こんなところに
爆弾仕掛けたのはどなたですか？
大事な取材中だっていうのに。

次回、TIGER & BUNNY
Many a true word is
spoken in jest. See you!

第3話_予告

どうも！　TIGER & BUNNYのなんに
でもマヨネーズをかける方、虎徹です！

おぉ！　歌ってるね、ブルーローズ。
あら？　素顔でも歌ってる。
え！？　**ヒーローやめるって？**

次回、TIGER & BUNNY
ふぇありーず、いず…？

第4話_予告

どうも！　TIGER & BUNNYの
お風呂で歯を磨く方、虎徹です！

バーナビーのバースデーか、
ここはひとつ盛大……。
え？強盗事件？こんな時にぃ…

次回、TIGER & BUNNY
ごーふぉあ、ごー…
これってどういう意味？

第5話_予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの好きな物は
後に取っておいて食べる方、バーナビーです。

え？ **ファイヤーエンブレムに
殺人容疑？** この紋章は…。

次回、TIGER & BUNNY
Fire is a good servant
but a bad master. See you!

第6話_予告

どうも！ TIGER & BUNNYのキャン
ディーはすぐ噛んじゃう方、虎徹です！

お？また出てきたか、このヤロウ…
お前は一体何者だ！
…って聞いても教えてくれなさそうだな！

次回、TIGER & BUNNY
ざ、う、るふ、の、のうず…

振り返ろう！ タイバニ流 “次回予告”の世界

THE COLLECTION OF TRAILERS

「タイバニ」シリーズを振り返るにあたって、忘れてはならないのが次回予告。日頃はシュテルンビルトの平和を守り、事件と隣りあわせの虎徹とバーナビーの劇中では見られない一面があらわになることもあって番組放映中から話題となった。今回、『The Rising』公開記念として全次回予告を掲載。さらに西田征史氏によるコメントも紹介したい。

第7話_予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの同じメガネを
5つ持ってる方、バーナビーです。

えっ？**ヒーローキャンペーン？**
えっ！このメンツですか？

次回、TIGER & BUNNY
There is always a next time.
See you!

第8話_予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの間接照明に
こだわる方、バーナビーです。

なんで**赤ん坊**なんか預からなきゃ
ならないんですか…
ちょっと、僕の部屋汚さないで下さい！

次回、TIGER & BUNNY
Spare the rod and spoil
the child. See you!

第9話_予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの
ジュースに入ってる氷は食べちゃう方、
虎徹です！

有給休暇か…え！？ **爆破テロ！？**
休んでる場合じゃなさそうか…

次回、TIGER & BUNNY
えっと…、しーゆー！

第10話_予告

ハーイ、TIGER & BUNNYのワインは
ロゼを選ぶ方、バーナビーです。

やっと正体を現したな、**ウロボロス！**
折紙先輩頑張って。
この作戦が成功すれば、僕は…

次回、TIGER & BUNNY
The die is cast. See you!

第11話_予告

どうも！　TIGER & BUNNYのハンバー
ガーは一度潰してから食べる方、虎徹です！

ついに辿り着いた**バーナビーの仇。**
このヤロウ、なんてヤツだ。

次回、TIGER & BUNNY
ていく、へ、へ、へーど…
とりあえずヤバイ！

第12話_予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの
ティッシュペーパーは2枚重ねて使う方、
バーナビーです。

ついにこの日を迎えたんだ。
僕は自分の力で**ジェイクを倒す…**

次回、TIGER & BUNNY
Confidence is a plant of
slow growth. See you!

第13話＿予告

どうも！　TIGER & BUNNYのいつも深爪気味な方、虎徹です！

いや〜、ようやくひと安心。
ここまで来たかぁ。
というか、これからどうなっちゃうんだ!?

次回、TIGER & BUNNY
らぶ、いず、ぶらいんど。
…ラブ、って…

第14話＿予告

ハーイ、TIGER & BUNNYのいつも寝る前にミルクを飲む方、バーナビーです。

えぇ？ **スカイハイさんが恋!?**
これは大事件の予感！

次回、TIGER & BUNNY
The sky's the limit...
See you!

第15話＿予告

どうも！ TIGER & BUNNYの靴下は左からはく方、虎徹です！

また出やがったな**ルナティック！**
一体何者なんだお前！
あれ？俺やられてない？

次回、TIGER & BUNNY
とっ、とぅるーらいずあ、
…も、もう1回やっていい？

第16話＿予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの美容室は一ヶ月に二度行く方、バーナビーです。

虎徹さんがご実家に？まぁ歳も歳だし。
ゆっくり休んでくださいね、**おじさん。**

次回、TIGER & BUNNY
Blood is thicker than water.
See you!

第17話＿予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの体は首から洗う方、バーナビーです。

…！ あの女が目を覚ました……
これでついに
ウロボロスの真相が…。

次回、TIGER & BUNNY
Ignorance is bliss.
See you!

第18話＿予告

どうも！　TIGER & BUNNYの夢に出てきた女優さんが好きになっちゃう方、虎徹です！

ウロボロスの真相は、再び闇の中へ。
でも**俺はもうヒーローを…！**

次回、TIGER & BUNNY
ぜぁーず、のー、うぇいあうと…
えーこれ、合ってる？

次回予告 誕生秘話

次回予告の役目は次のエピソードへの導入なのですが、それにプラスする形で虎徹とバーナビーの些細な日常を盛り込みました。ふたりのちょっとしたクセや食べ物の好み、何気ない仕草や日頃愛用している小物など、本編では描き切れないエピソードを盛り込むことで、ふたりの新たな一面を感じてほしかったんですよ。それだけに毎回のネタ探しには苦労させられっぱなしで、第22話のホクロのときは、自分の体を眺めながら書き切りました（笑）。『The Rising』の予告を書く機会があったらライアンで試してみたいところですが、俺様キャラだけに自分のことを話すだけ話して終わりそうですね。

──西田征史［脚本・ストーリーディレクター］

第19話＿予告

ハーイ、TIGER & BUNNYの歯ブラシは電動を使う方、バーナビーです。

虎徹さん、気をつけてください。
全てはこの男が…！

次回、TIGER & BUNNY
Full of courtesy,
full of craft. See you!

第20話＿予告

どうも！　TIGER & BUNNYのファンレターは持ち帰って読む方、虎徹です！

おい、どーなってんだよー！
俺が犯人なワケ、はぁぁぁ！？
何だコイツ！？

次回、TIGER & BUNNY
ハイ！ごいっしょに！
へぶんー、へるぷすー、ぞーずぅー…

第21話＿予告

どうも！　TIGER & BUNNYの新聞は広告から目を通す方、虎徹です！

っしゃあ！　皆まとめてかかってこい！
楓、どうしてお前…
やめろぉぉぉ！

次回、TIGER & BUNNY
ばっど、らっく、おぶ…おぶ…
え…っだ！

第22話＿予告

どうも！　TIGER & BUNNYの足の裏にほくろがある方、虎徹です！

な、バーナビー！
頼むから**早く思い出してくれ！**
じゃなきゃ、俺はもう…。

次回、TIGER & BUNNY
みすふぉーちゅー…、
不幸は単独では来ない！

第23話＿予告

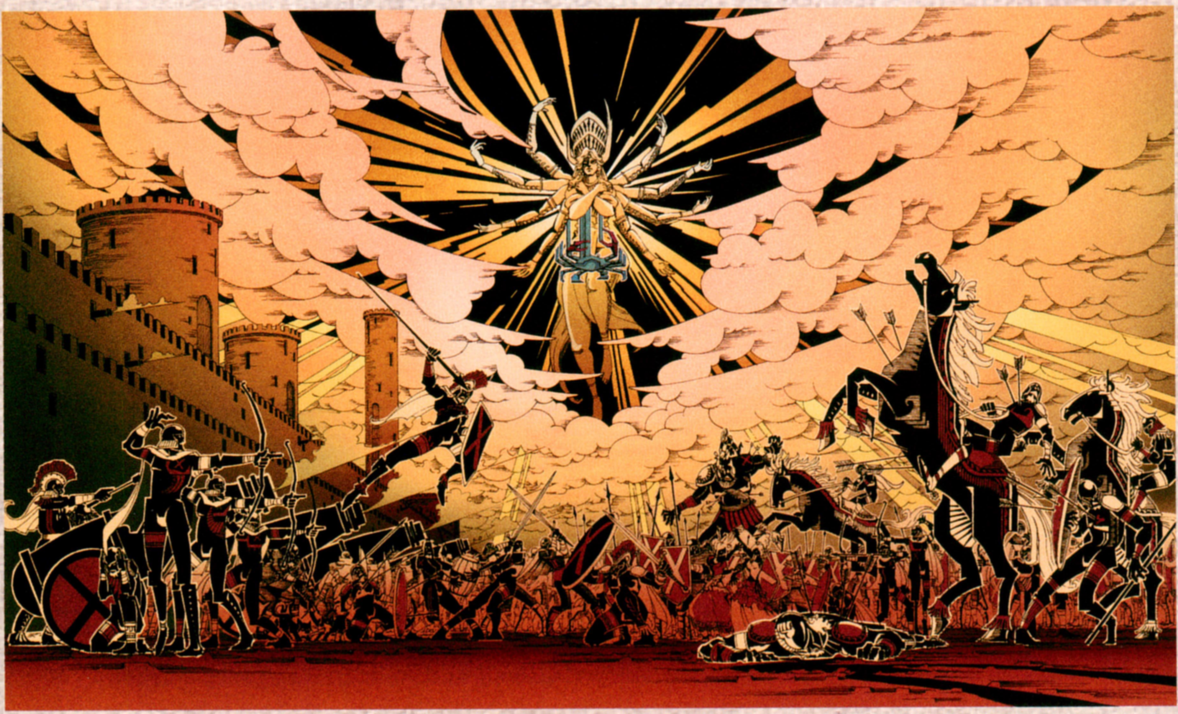
ハーイ、TIGER & BUNNYの平熱は35度7分の方、バーナビーです。

よし、こうなったら僕たちが…！
なんだこいつ、
うわあああああああっ!!

次回、TIGER & BUNNY
Nothing ventured,
nothing gained. See you!

第24話＿予告

次回、TIGER & BUNNY **最終回**
Eternal immortality.
See you.



■ 02: 遣わされるカニ

いつ、誰が語り伝えたのかは定かではないが
女神伝説は、シュテルンビルトの誕生と
その地に暮らす人間の姿を描き出している。

……遥か昔、人々がまだ"正義"という言葉を知らなかった時代に
ひとりの女神がシュテルンビルトの大地に小さな町をつくりました。

町の人間は、欲望のままに略奪を繰り返しては
傷つけあっていました。
見かねた女神は1匹のカニを遣いに出します。カニは告げました。

「汝、己の業を悔い改めよ。さもなくば天罰が下るであろう」

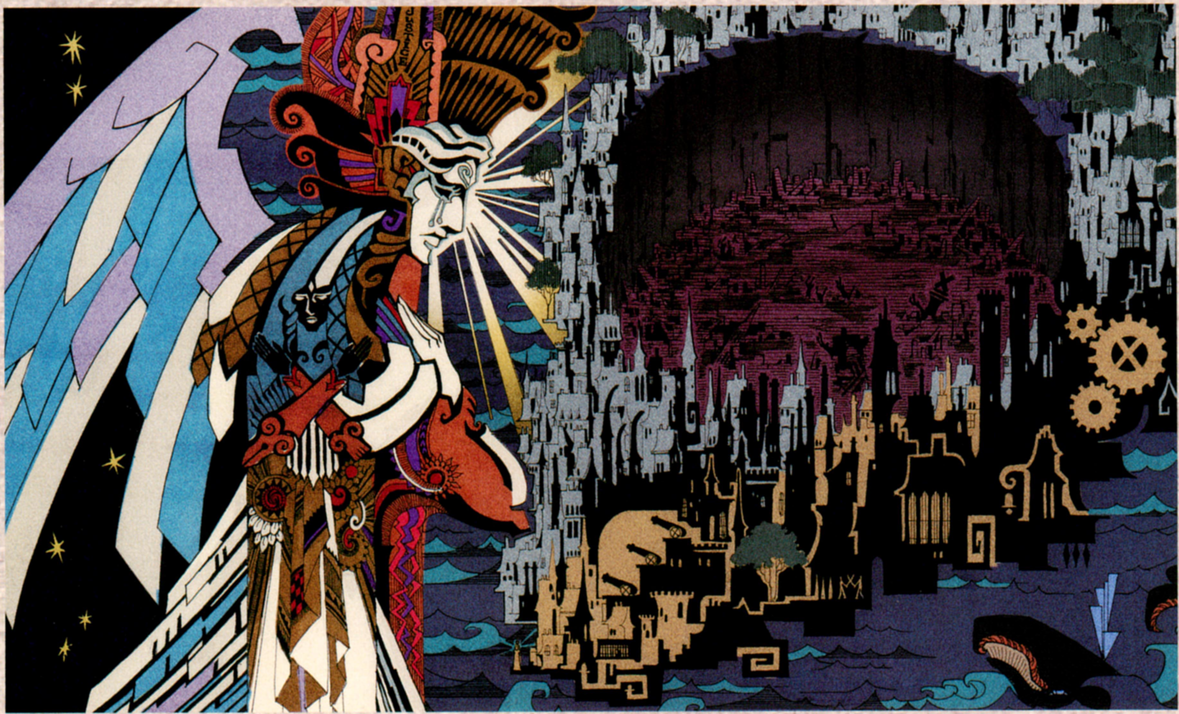
ところが、人間はその言葉に耳を傾けることなく
あろうことか遣いのカニを食べてしまったのです。
女神は哀しみに打ち震えると
唸り声を響かせ、天空にその御姿をあらわします。

すると、どうでしょう。
天から鋼の剣よりも硬き、尖った光の雨が降り注ぎ
牛や馬は恐れをなして海へと飛び込み
さらに多くの人々を眠りの病が襲います。

女神から数々の天罰を下されても
なお、正しい心をもとうとしない人間たち。

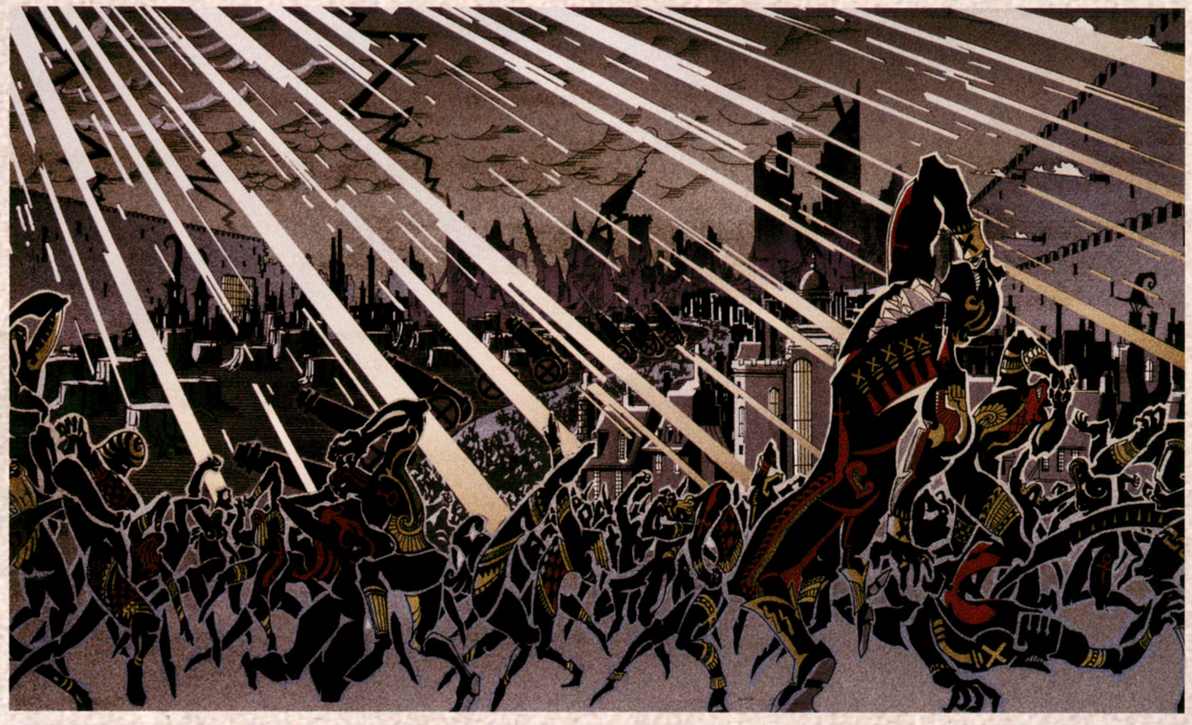
最後に女神はすべてを無に還すべく

人々が正義の心を忘れ去ったとき、女神は再



■ 08: 女神の大穴

■ 01: 創造する女神



■ 05: 光の雨

■ 07: 眠りの病

女
それは、人々の愚かさ
伝
SPECIAL EDITION
feat. 01
TIGER & BUNNY THE RISING
LEGEND OF GODDESS
TIGER & BUNNY THE RISING
LEGEND OF

神

女神の加護を受けたかのように発展を遂げた巨大都市シュテルンビルト。だが繁栄とは裏腹に、この地には奇妙な物語が伝承されている。

かつて、女神の手により生まれた地に住む人々は、この世の春を謳うあまり感謝の心を忘れ、欲望の赴くままの行いをする。それを嘆いた女神が怒りの鉄槌を下し、最後には人々を暗闇に落とす。その段になり、ようやく人々は正義の心を宿し始めたという、シュテルンビルトに伝わる物語——それが「女神伝説」である。

そしていま、この伝説に酷似した数々の事件がシュテルンビルトで巻き起こる。果たして、この地に再び女神伝説がよみがえるのか??

を嘆く、戒めの物語

SPECIAL EDITION feat 01

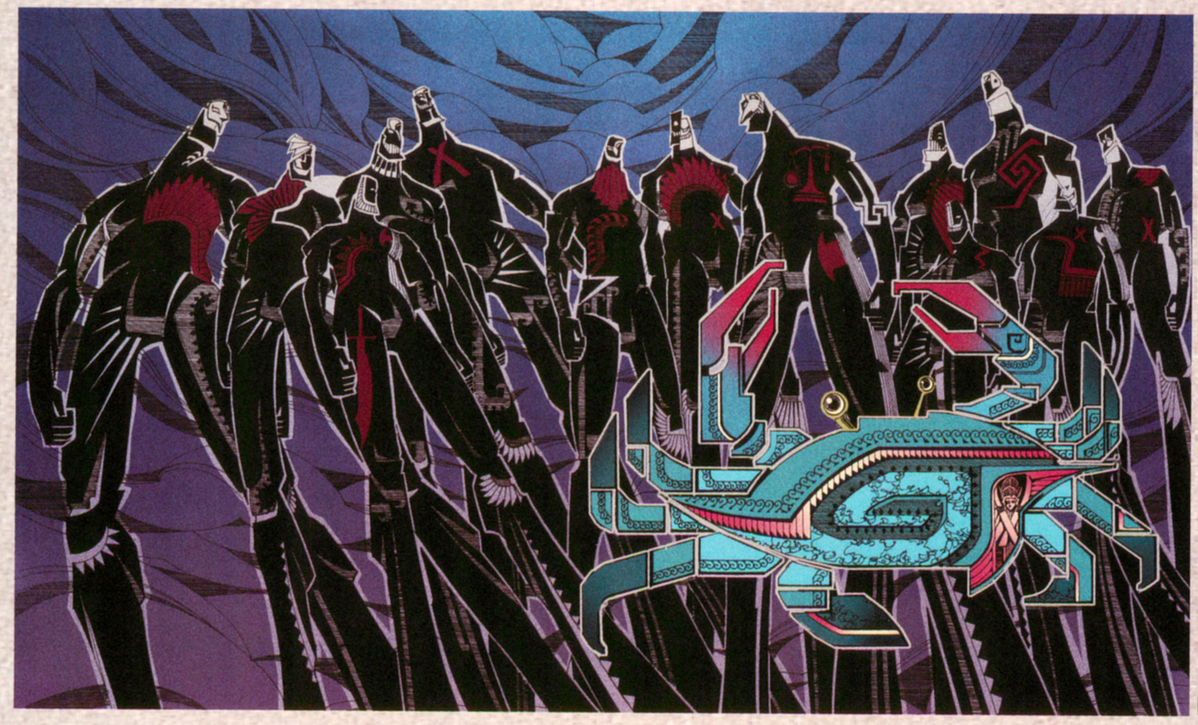
GODDESS

説

■ 04: カニの晩餐

■ 06: 恐れる牛と馬

■ 10: 女神に手を伸ばす人々



■ 03: 人々に告げるカニ

町を覆い尽くすほどの暗く深い大穴を開けます。

暗闇へと落とされた町の人々は
そこで初めて醜い己の行いを悔い
正義の心を宿し始めたのでした。

現在のシュテルンビルトの住民は女神を敬い
街の中心に据えられた巨大な女神像は人々の生活を見守っている。
大地に巨大な穴が口を開き
それをきっかけに人々が正義に目覚めたとされる日は
「ジャスティスデー」と呼ばれ
盛大なお祭りが行われている。

……このように「女神伝説」は形を変えて
人々の記憶に留まっているが
伝説の形骸化が女神の逆鱗に触れることになったのだろうか。

現在のシュテルンビルトは3つのフロアから構成され
様々な人種や言語、そして思想が入り混じった巨大都市として
その威容を誇っている。
これはまさに人類の英知の賜物と言える。
しかしそれは人々がより快適さを求め
さらなる富と快楽を享受しようとしてきた
結果でもあるのではないだろうか?

栄華を極めた人々を突然襲った数々の事件。
問われるは、人の正義か、それとも──

び、伝説に謳われた災厄を繰り返すであろう

■ 09: 落とされた人々

STAFF
スタッフ

それぞれの信念のもとに活躍するヒーローたちの姿を描いた『The Rising』。
作品の制作に携わった5名の主要スタッフの口から語られた想いをここに紹介しよう。

ファイル
FILE

STAFF FILE 01

監督 米たにヨシトモ

「タイバニ」の世界を守りつつ、映画として攻

『The Beginning』では、"「タイバニ」シリーズを守る"という基本姿勢を最後まで貫いて作品をつくりあげました。苦労もありましたが、舞台挨拶のときにファンの皆さんのキラキラした笑顔を見て、こんなに楽しんでいただけるなら『The Rising』はもっと頑張らなきゃいけないと改めて心に刻みましたね。

今回は完全新作ですので、西田（征史）さんや桂（正和）さん、そしてプロデューサー陣がこの作品に描いた夢を捨てることなくつくり切るにはどうすればいいのか、と頭を悩ませることが私の役割でした。事実、シナリオもコンテも納得行くまで何度も描き直して、全員の意見を集約する形でつくるという、徹底したやり方を採り入れています。シナリオ面では、テレビシリーズとはまた違う大きな流れでシュテルンビルトを描きたいと考えて、"ジャスティスデー"と女神伝説を軸にしました。そのことで、映像的にも華やかな感じが出せればと思っていました。

新ヒーローであるライアンは、虎じゃないならライオンかなと発想したのが最初でした（笑）。ライアンのデザインはこちらで大枠なラフを描いていて、最終的なデザインを桂先生にお願いした形です。他にも桂先生にはヒーローの私服をお願いしたのですが、デザインがあがってきたらキャラクターそのものも進化していました。特にバーナビーやパオリンは見た目も大きく変化していたので、そこも含めて今回の映画で再現できるように丁寧に描くことを心がけました。

プロデューサー陣と本作の方向性を決める段階でよく話題にあがったのは、作品の"リアリティ"でした。関係スタッフと話をし、さらに実写的な映像を見せていきたいという意図があったのですが、世界観を大きく変えてしまうのは作品の根幹をいじることになるので、そのバランスは慎重に探りました。そこで私としては、あまり漫画っぽく描かない、ということを念頭に置いています。例えばヒーローたちの動きも、特撮ヒーローに近いアクションを意識しました。

物語の本筋と並行する形で、ネイサンをフィーチャーするのは、当初から考えていたことです。ネイサンの内面をもう少しじっくり描写する話もあったのですが、「タイバニ」の表現手法からあまりズレてしまってもいけないので、要点を整理しました。また今回ロックバイソンが迷走しているのですが、本当はアントニオ自身ももう少し取りあげたかったです（笑）。逆に、ルナティックなどは、作品のなかでのポジションがきっちりと固まっているので、そのポジションに終始させました。ですが、今回の戦いを経て、彼にも変化が見えるようになるのかどうかは是非観て感じていただければと思いますね。

新しいキャラクターたち、ジョニー、マックス、カーシャの

■PROFILE
アニメ監督・演出家。1963年生まれ。主な参加作は、監督・脚本・絵コンテ・演出を手がけた「勇者王ガオガイガー」(97)、監督・原案・絵コンテ・演出を務めた「ベターマン」(99)、監督・シリーズ構成・脚本・絵コンテ・演出を担当した「Dororonえん魔くん メ～ラめら」(11)など。

Director

YOSHITOMO YONETANI

める――それが『The Rising』なんです

3人は、「もっているNEXT能力は他を凌駕するものではないけれど、知恵を絞ってそれを上手く利用するタイプ」をコンセプトにしています。例えばジョニーは、能力自体は非力ですが、拳法使いとして充分強い。他のふたりもそうですが、能力に奢らず、努力と知恵を駆使してヒーローに立ち向かっていることを強調できればと思っていました。

アポロンメディアにはシュナイダー、ヴィルギルという物語のなかでキーとなるキャラクターを登場させましたが、アレキサンダー・ロイズも実は重要な立ち位置を演じています。彼と家族の関係を敢えて描いたのは、虎徹主観ではない形で虎徹を描きたかったからです。事実、作品のなかでとても想い入れのあるシーンになりました。その意味では虎徹とひとり娘の楓との関係性もひとつのテーマでしたね。ですが、楓のNEXT能力を具体的に描く方向性ではなくて、心の微妙な変化が伝わるものにしたいとの意図がありました。楓が最後に発表する"詩"、あれがシナリオであがってきたときには興奮しましたし、これがあることで1本の映画としての締めになったと思います。

虎徹とともに主人公であるバーナビーも、当初はもっとたくさんセリフがありました。ですが、自分の心情を喋れば喋るほど薄っぺらくなるので、あえて沈黙している部分を入れて、その裏にある感情を読み取ってもらえるような描き方にしました。バーナビー役の森田(成一)さんも、テレビシリーズ以降ということで境遇も大きく変化したバーナビーの心情を汲み取って声を当ててくれたのですが、1時間40分の映画としてはその感情を掘り下げることが難しくて、バランスが取れないところが出てきてしまいました。ですので、音響監督の木村(絵理子)さんも交えて何度も話しあい、その結果、誰もが納得行く、完成形のバーナビーができましたね。一方で、平田(広明)さんも凄く完成度が高く、アフレコ現場に入った段階からしっかり虎徹になっていました。他のヒーローの皆さんも、「タイバニ」の世界観に対する理解度が格段に深まっていましたね。ライアン役の中村(悠一)さんも、現場の雰囲気で何を求められているかすぐに把握したみたいで、2日目には自分のポジションを理解していただけていました。

また映像についてはCGと手描きの絵を組みあわせるだけで何日もかかるような、カロリーの高い手法で進めています。今回は正攻法でやると決めたので、最後まで全うしようとスタッフ全員が一丸となって作業にあたりました。現場には「タイバニ」に何年も関わっていて、愛情以上の、自分の血肉となっているスタッフが大勢います。そうしたスタッフの熱と、ファンが求めている「タイバニ」をすりあわせていくことに監督として集中しました。「タイバニ」の世界観を守りつつ、映画としてひとつの作品として成立するように攻める――『The Rising』はそういった想いが結実したものになったと思います。ヒーローがもがき苦しみながら、でも市民のために生きていく。そんな姿に、何が悪で何が正義かではなく、色んな生き方があるのが人間なんだと、ファンの皆さんにも感じ取ってもらえれば嬉しいです。

(2013.12　上井草にて)

STAFF FILE 02

ヒーローたちの何気ない日常の姿に、

脚本・ストーリーディレクター 西田征史

『The Beginning』でも感じていたことですが、テレビシリーズで大団円を迎えたこの作品をもう1度世に送り出すには、新たに続ける意味を見出す必要がありました。僕のなかでは一応テレビシリーズで終わるつもりで書いたので。とは言え、実際には書き切れないエピソードは一杯あったんですよ。それを切り捨てながら25話にまとめあげたのがテレビシリーズだとすれば、使えなかったエピソードをここぞとばかりに盛り込んだのが『The Rising』と言えるかもしれません。新たなエピソードを書き足すことで、1度観たことのあるテレビシリーズに新たな意味を見出し、さらに面白く感じてもらえたら——それが、本作の脚本を手がけるうえでの立脚点となりました。

それと『The Rising』はテレビシリーズが終了してからしばらく後の話ですよね。なので作品のなかで時間経過が感じられるようなシナリオを心がけました。前に出がちだった虎徹をちょっと抑えてみたり、目的を完遂したバーナビーにヒーローとしての存在意義を模索させてみたり、変わったところでは虎徹という無二の親友と別れたロックバイソンを迷走させてみたり……などなど。見た目の印象やファッションだけではなく、立ち振る舞いや言葉遣いからも時間の流れが感じられるようになっているはずです。もしかしたら登場人物の変化に違和感を覚えるファンの方もいるかもしれません。それでも根本のところは変えていませんのでご安心を。ときの流れはある意味で無情であって、生きている人はどうしても変わっていかなくちゃならない部分がある。でも「ヒーローとしての志や誇りは失っていない、変わらないものもあるんだよ」というメッセージだと受け止めてもらえると嬉しいですね。

僕は、「タイバニ」は群像劇だと思っています。話の展開上、どうしても虎徹とバーナビーにスポットが当たりがちだけど、実際には他のヒーローたちも常に何かに苦しみ、葛藤しているんですよね。そんなひとつひとつの想いをどうやって展開させていくか——それが『The Rising』の見せ場とも言えるかなと。ぶっちゃけたことを言うと、ヒーローとしての活躍ぶりを書くよりも、ヒーローたちの普段の生活を見せるほうが自分のなかで描きたいことだったりします。エンタテインメント作品だからアクションシーンに重きを置くのは当然ですが（実際に『The Rising』のアクションシーンは過去最大級

Screenplay | Story Director

スタッフファイル02

MASAFUMI NISHIDA

■PROFILE
脚本家・演出家・小説家。1975年生まれ。『ガチ☆ボーイ』(07／監督：小泉徳宏)で映画脚本担当後、「怪物くん」(10)や「妖怪人間ベム」(11)など数多くのテレビドラマや映画・舞台の脚本を手がける。「TIGER & BUNNY」(11)は初めて参加したアニメ作品で、脚本とシリーズ構成を兼務。今秋には長編映画として初めて監督を務め、原作と脚本も兼ねた『小野寺の弟・小野寺の姉』が公開される。

彼らが抱える想いを込めてみました

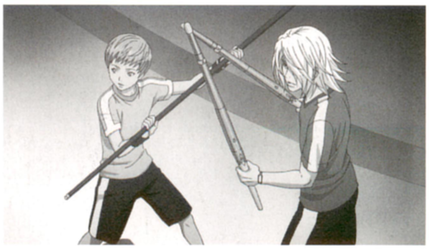
の長尺と迫力ですしね)、ヒーローたちの何気ない会話や仕草を生み出すのは楽しいし、自分にとって幸せな時間です。スカイハイ、折紙サイクロン、ロックバイソンの絡み方や、ファイヤーエンブレム、ブルーローズ、ドラゴンキッドら女子組の親密度合、ルナティックの立ち位置や、ゴールデンライアンの見た目は“ゴージャスな俺様キャラ”だけど自分なりにヒーローとしての心意気ももっているところ……など、観てほしいところは色々。そんなヒーローたちのエピソードを集めて紡ぎ出したのが『The Rising』と言ってもいいかもしれません。虎徹やバーナビーの活躍をどれだけたくさん描いても、やはりそのまわりの人たちが生きてこないと肝心のふたりの魅力も失せてしまうと思いますし。ひとりのヒーローの輝きが別のヒーローを鮮やかに映し出し、結果として全ヒーローが主役のような立ち位置にいる。そんな作品に感じていただけたら嬉しいです。

ちなみにヒーローのパーソナリティーを作品内に散りばめるという手法は、テレビシリーズでは主に次回予告のかけあいでやっていましたが、『The Rising』では入場者プレゼントで試してみました。本編では語り切れずにいたヒーローたちのエピソードを、書き下ろしコラムとして掲載してみたんです。全員分をコンプリートするのはタイヘンだとは思いますが、どのコラムもヒーローの新たな一面を感じられるように仕あげています。画面ではなくテキストを通して体感するヒーローたちの姿を楽しんでください。

えー、小難しいことを色々言ってみましたが、僕が「タイバニ」ファンの方々に伝えたいのはただひとつ。「ご来場ありがとうございます! どうぞ楽しんで観てください」のひと言。ま、ふた言とも言えますけど(笑)。作品を観て、劇場を後にするとき、来たときよりもちょっと足取りが軽くなっている——そんな作品にしたいと思って脚本に挑みました。シュテルンビルトで活躍するヒーローたちの世界に浸って、気持ちよく、帰り道がちょっと明るく見えるようになると嬉しいです。

『The Rising』が終わっても、虎徹やバーナビー、仲間たち皆の人生はこの先も続いていきます。想像してみてください、彼らの明日を。

(2013.11　世田谷にて)



STAFF FILE 03

キャラクター原案・ヒーローデザイン

桂 正和

「タイバニ」のデザイン・コンセプトは「時代か

テレビシリーズのときのデザインは企画が動いたばかりだったようで、サンライズさんからはわずかな資料でのオファーでしたので、僕が自由に進めていたところがありました。一方、『The Rising』では米たに（ヨシトモ）監督が明確なビジョンをもっていたことから、打ちあわせができて助かりました。劇場版初登場のライアンは決定稿までかなりイメージが変わりました。当初は俺様なチャラ男とイメージを伝えられて、どちらかと言えばチャラ男の要素が強かった。やや線が細くて、見た目も中身も軽くて、口先だけで周囲を煙に巻くようなヤツ。でも実際にこれを絵に落とし込んでいくと、どことなくバーナビーに似てしまうんです。これにはまいりましたが、試行錯誤の末に「俺様キャラ」というキーワードを増幅させたら、そこからは一気呵成でした。ヒーロースーツのライアンは派手にするために肩パーツを巨大にしたらバランスが取れなくて、それならいっそのこと翼にしてしまえ!! と背中に羽をつけたり。ただせっかく羽をもっているのにキャラクターの設定上飛ばせられないことが判明して、ちょっと消化不良気味ではあるんですが（笑）。基本色を金にしたのも名前が「ゴールデンライアン」だったからで、僕の手がけたヒーローとしてはかなり珍しいタイプになりました。ゴテゴテして線の多いデザインは画面で動かしにくいし、細部に目を取られて全体像を伝えにくいんです。それでも「俺様キャラ」ならこれくらい振り切ったほうがいいんじゃないかという判断のもと、やっと完成したのが、皆さんが目にしているゴールデンライアンです。ちなみにボツにした素面のライアンもお蔵入りしたわけではなく、『The Beginning』のあるシーンで使われているんです。看板に描かれたポスターとして一瞬映るだけなんですが、いかにも「タイバニ」らしい遊び要素ですよね。

そんなこんなでヒーロースーツのデザインには色々気を使いましたが、素面状態のキャラクターは割合あっさりとデザインできた気がします。それでも大変な要素はあるわけで、『The Rising』ではキャラクターのファッションに気を使いましたね。脚本の西田（征史）さんが「今度は春の話だよ」と言うから、相応の服を着せようとしたんですが、現実世界でも春って何を着たらいいかわからないじゃないですか。肌寒いと感じる人もいれば、もう暖かいとばかりに上着を脱いでしまう人もいる。それはキャラクターの個性であって、キャラクターを生み出すうえでの重要なファクターとなる。個性がブレると、統一したキャラクター感は演出できないわけで、結果、キャラクターの性格を思い出しながらのデザインとなりました。例えばバーナビーは薄手のロンTをメインにしつつ、ライダースジャケットを描き添えておくとかね。実際にはライダース

■PROFILE
漫画家。1962年生まれ。「タイバニ」シリーズではキャラクター原案を手がけ、舞台版では実物大ヒーロースーツの監修も担当。漫画代表作に「ウイングマン」、「電影少女」、「I"s」など（すべて週刊少年ジャンプ／集英社）。現在は週刊ヤングジャンプにて「ZETMAN」を連載中。

スタッフファイル03

MASAKAZU KATSURA

ジャケット姿がバーナビーの基本ラインになりました。だからヒーローが活躍する季節は冬か秋にしてほしい（笑）。春先とかの服は、チョイスが難しいし、絵で描くとさっぱりしてしまって面白味が出しにくいんですよね。キャラクターを立てる方法には色々な考え方があると思いますが、僕の場合は季節感も重要なデザイン要素となるのです。

最近はご当地ヒーローを始め、無数のヒーローが各種メディアに登場していますよね。ヒーローのインフレが起きつつある。「タイバニ」だって8人もヒーローがいるし、そこにライアンというニューカマーが加わった。だからこそヒーローの個性を出す作業が重要になると思います。最近はリアルさを追求し、可動域を考慮したため複雑な線で構成されたデザインのヒーローを多く見かけますし、それが主流のように感じます。ですが僕は基本的にシルエットだけで誰だかを判別できる形の、それでいてシンプルなデザインが好きなので、ヒーローの最高峰のデザインとして、僕が目指しているのはウルトラマンなんです。単純な円と線だけで描かれた顔がなぜここまで魅惑的な表情を生み出すのか――考えただけでもワクワクするし、あんなデザインを生み出せるのは奇跡的なことで圧倒的なデザインセンスの賜物ですよね。なので「タイバニ」については時代の流れを逆行した手法を取り入れてみました。タイガーはまだウルトラマンの域には行き着けてないですが、とにかく僕が小さい頃に観たアニメや実写のヒーロー、彼らがもっていたケレン味を出してみたかった。ショーアップされた派手さに重点を置き、実際に着たら動きづらいだろう巨大な肩パッドやボリューム感のある腕や脚パーツは、リアルさを追求すると否定される要素ですよね。でもちょっと古臭い感じを出しながらも派手なフォルムを見せつけるのは、プレイスメントを有するヒーローらしいなと思ったわけです。その最たるものがライアンで、彼の派手さはショーアップされたヒーローというコンセプトを反映したもの。本当に好きにやっていいなら、もっと線を減らして、プレイスメントロゴも外したデザインにしてしまうけれど、それでは「タイバニ」じゃなくなってしまうからね。後はこのヒーローたちが画面上でどのように動いてくれるか、それを楽しみにしながら劇場公開に臨むつもりです。

らの逆行」にあるんです

『The Rising』では、初めて声を入れる仕事に挑戦させてもらいました（笑）。

全員の集合写真を撮りたいからというので収録現場に顔を出したら、平田（広明）さんの「せっかくだから何か入れてきゃいいじゃん!」の一言で、マイクの前に立つことに。プロの聖域に入り込んでいるわけで、スタジオ内の独特の空気に緊張感がハンパなかったのを覚えています。

最後まで平田さんが熱心に演技指導してくれたからどうにか形にはなったとは思いますけど、どうなっているか心配です。そんな予想外の話題を提供してくれた『The Rising』。2年以上も向きあってきたタイトルの集大成として最高の出来になっていると思います。

（2013.12　上井草にて）

STAFF FILE 04

Director YOSHITOMO YONETANI / Screenplay / Story Director MASAFUMI NISHIDA / KATSURA / Executive Producer MASAYUKI OZAKI / Producer KAZUHIKO TAMURA

作品だけでなく、プロジェクト全体

エグゼクティブプロデューサー 尾崎雅之

テレビシリーズから始まった「タイバニ」が、完全新作の劇場版として『The Rising』を公開するところまで来て、プロジェクトの一員として感慨深いですし達成感がありますね。プロジェクトが成功するかどうかは、作品のクオリティのみならず、色々なタイミングやファンの熱意などに左右される部分が大きいのですが、本作においては、それらがうまくいい方向に進んでくれた結果だと思っています。

「タイバニ」がここまで話題となった要因のひとつとして、劇中に登場するヒーローが企業のプレイスメントロゴを背負っている点が挙げられると思います。ですが、単にスポンサーのロゴをつけただけだと、ここまでの効果はなかったでしょうね。ヒーローが職業として成り立っている世界観を提示できたからこそ、この仕かけが活きたんだと思います。テレビシリーズがヒットしたことで、企業側から声をかけていただけるようになったときは、やはり嬉しかったですね。

『The Rising』では、テレビシリーズからご支援いただいている企業の他、新たな企業を加えて計21社が参加されています。もちろん、様々な事情でスポンサーが変わることもありますが、ヒーローとスポンサーの親和性にはこれまで同様こだわりました。ロックバイソンには"牛"関連の企業は外したくなかったですし、"さすらいの重力王子"というニックネームのゴールデンライアンには、"重力"つながりで体重計を販売しているタニタさんにご支援をいただきました。さらに、大江戸温泉物語さんの場合は、"和"のイメージを活かすべく折紙サイクロンにロゴを背負わせています。そうした流れのなかで、スポンサーの変更を"シュテルンビルトの経済活動の一環"として捉えてくれるような見方が生まれてくれれば嬉しいですね(笑)。

また、ヒーローが職業として成立している架空の近未来都市"シュテルンビルト"に代表される「タイバニ」の世界観そのものが、現実の世界でコラボ展開しやすい側面もあるのかなと思います。今回も、羽田空港のローソンを"シュテルンビルト店"として装飾していただいた他、劇場限定の商品としてハローキティとのコラボグッズを発売しました。このハローキティは、"シュテンルンビルト限定・ご当地キティちゃん"という捉え方もできると思いますし(笑)。各ヒーローのキャラクターソングもたくさんリリースしていますが、職業ヒーローであり、タレントという立場なので、歌手デビューしても(または、させられていても)おかしくはない(笑)。こうした遊びやすさや解釈の幅広さが、多彩な商品展開につながっているのではないでしょうか。

ここまで多くの企業に関わっていただいたことで製作委員会としてはその調整にかなりの労力を費やすことになりました。ここまで展開できたのも、企業との間を取りもっていただいたADKさんを始め、関係者の皆さんが主体性をもって動いてくださった賜物だと痛感しております。おかげで放送開始からまだ3年ながら、舞台版の上演や大規模なイベントを開催するまでに至りました。

『The Rising』は、テレビシリーズが完結した後、劇場版2部作の企画開発を進めるなかで「とにかくこの作品ですべてを出し切ろう!」と話しあい、生まれました。米たに(ヨシトモ)監督や

Executive Producer
スタッフファイル04
MASAYUKI OZAKI

■PROFILE
サンライズ取締役、キャラクターワークス事業部長／T&Bエグゼクティブプロデューサー。サンライズ海外営業部長も兼任する。「タイバニ」シリーズでは事業全体のプロデュースやプロモーション、マネージメントを統括。企画面やビジネスおよびプロモーション面など含め多方面から作品を支えている。

にドラマ性をもたせることを意識していました

田村(一彦)プロデューサーを中心とする全スタッフの力が結集した、まさに“集大成”と呼ぶにふさわしいものになったなという実感があります。満を持したオリジナル新作ではありますが、既存ファンに向けたプロモーションの初期段階では、敢えてバーナビーと新キャラクターのライアンを中心に据えました。これはファンに色んな想像をしてもらいたいとの意図によるものです。リスキーな手法でしたが、ハリウッドテイストの神話調の特報も含めて、様々な謎かけをすることで期待感を持続していただくとともに、鑑賞時の満足度もより一層高まると信じて、宣伝チーム一丸となって忍耐強く計画的に進めてこられたと思います。
一方で、作品の完成に至るまでは様々な困難があり、特に公開延期は苦渋の選択でした。やはりクオリティの確保は最優先命題ですから、そこは保つべきという観点から、プロデューサー陣や製作委員会内でも何度も議論して、最終的に公開時期を変更することになりました。ファンの方々には待っていただくことになりましたし、プロモーションプランも大幅な練り直しを余儀なくされました。とは言え、ビジネスにおいて不確定要素は常に発生するものですし、その変更をチャンスと捉えようと。急遽開催を決めた「SUPER PRELUDE」というイベントも、延期となった状況を逆手に取って、“シュテルンビルトでの制作発表”をコンセプトにしました。各方面には様々な調整をお願いすることになりましたが、新プレイスメントロゴやUNISON SQUARE GARDENによる主題歌の発表など、情報解禁のタイミングをここに集約させて、サプライズ感を最大限まで高められたかなと思います。
「タイバニ」はUSTREAMやバンダイチャンネルで幾度も、これでもかと言うくらい配信をしてきましたし、twitterでの情報発信も積極的に行っています。オリジナル作品ですので、熱を維持するためには様々なコミュニケーションツールを最大限駆使することが必須です。作品だけでなくプロジェクト全体にドラマ性をもたせて、飽きることなくファンに楽しんでもらうことも強く意識してきました。また、「タイバニ」は国境や年代を越えて老若男女が楽しめる間口の広い作品だと思いますので、ファンの裾野を拡大することも非常に重要な課題だと認識しています。アニメに興味のない人たちも、実在の企業ロゴが入ったヒーローの姿を見ると、何らかの興味を示されると思うんです。そういった人たちの目に触れるプロモーションというのは、これからも常に考えていきたいと思っています。
『The Beginning』の興行成績から見ても、「タイバニ」のファン層は首都圏を始めとする都市部に集中しています。その意味では、首都圏以外のところでファンを獲得する余地はまだあると考えています。3月からは、東京・名古屋・大阪・福岡で「The World of TIGER & BUNNY」という展示会を開催する予定ですが、これはその一環とも言えますね。また、北米、アジア、ヨーロッパなど、海外でも本作の公開が決まっています。作品に対する反応や楽しみ方が日本と海外でほとんど変わらないのも「タイバニ」の特徴ですので、今後も世界各地のアニメイベントに積極的に足を運んで、国境を越えてこの作品の普遍的な面白さを伝えていきたいですね。
今回、『The Rising』を観ていただいたことで、“タイガー&バーナビーはこの後どうなるのだろうか？”という想像が掻き立てられたかと思います。今後もファンの皆さんが望むものをご提供できるよう、様々な環境を整えていければと思っています。

（2014.1　上井草にて）

STAFF FILE 05

プロデューサー

田村一彦

スタッフのこだわりが生んだ、誰もが楽しめる

アニメプロデューサーの仕事といってもなかなか想像しにくいと思いますが、要はアニメ制作に携わるスタッフや関係各所をつなぐ橋渡し役といいますか、それこそアニメ制作にはつくり出す側、それを売り出す側といったように膨大な数のスタッフが関わります。『The Rising』は劇場作品ということでテレビ版をうわまわる総数のスタッフを動員しています。その人たちがプロとして真剣に作品をつくりあげていくということは、必ずどこかで意見の相違が生まれます。「いまよりもっといいものをつくりたい」という想いが強ければ強いほどそれは必然です。そんなスタッフたちの意見を吸いあげて、ひとつの作品として織りあげ、そして作品を広めるためにも多くの方々の力を借り、作品を世のなかに送り出していくのがプロデューサーのポジションです。ただし「タイバニ」シリーズでのプロデュース業は、他の作品とはやや趣が異なりました。それは僕自身も「タイバニ」シリーズの大ファンであり、たくさんのスタッフたちの情熱を作品に込めると同時に僕自身もいままでの作品以上に想い入れがあることにあります。

20数年前に入社した頃のサンライズはすでに「オリジナル作品のサンライズ」という立場を確立していて、良質で誰も観たことのない作品をリリースしていました。そんな環境で揉まれているうちに「いつか僕もオリジナル物を手がけたい」との想いが募りました。それからいくつもの作品を担当し、プロデューサーというポジションになってからもその想いだけは変わりませんでした。そんな折、2008年頃に多くのライトノベル作品のアニメ化が起こったんですよ。ライトノベルとは言わば、読者の等身大の世界を扱った小説です。ロボットや異世界からの使者などをモチーフとしていても、その根幹にあるのは読者に近しい世界であり、恋愛であり、等身大のドラマなんですね。ゼロ年代層に向けての新しいアニメを模索しているときにその特性は参考になり、それが結果的に「等身大のヒーロー」というキーワードを生み、「タイバニ」シリーズのきっかけとなりました。超絶的な力をもち、高みから僕らを守ってくれる存在ではなく、すぐ隣にいるヒーローの誕生です。でもヒーローの超絶的な能力バトルばかりに注目が集まり、一個人としてのヒーロー本来の姿が見えてこないのは、何ともつまらないんじゃないか、となったんです。身近な彼らの日常生活は難事件を解決する一方、大切な家族とのコミュニケーションに悩んだり、もしかしたらご近所とのつきあいに困っていたり、会社では怒られているかもしれない……。リアルな世界観にすればドラマを観慣れているユーザーがアニメを観ても、遜色のないものになるのではないか。一見ヒーローものという体裁を取り

■PROFILE
サンライズ入社後、進行担当としてアニメ制作現場と向きあいながら、制作者として必要なスキルを獲得。「いつか自分でもオリジナル作品を生み出したい」との願いを、「タイバニ」シリーズで実現した。

Producer
スタッフファイル05
KAZUHIKO TAMURA

エンタテインメントです

ながらも彼らの日常生活を丁寧に描き、多種多様な面からスポットを当てることで、ヒーローの存在感と魅力を積み重ねていきたい。ただ、企画の方向性は決まっても、実際の制作の苦労はまた別問題で（笑）。僕は制作なのでアニメのプロを集めて旗を振ることはできるんですが、僕自身が絵を描けるわけじゃなくて、1本のシナリオを仕あげられるわけでもない。こうしたいなというアイデアや新しい物にチャレンジしたいなという想いをどうやって表現したらいいんだろう……。その段階で膠着してしまいました。表現する手段に行き詰ってしまったんです。だから桂（正和）さんと西田（征史）さんに出会えたことは、「タイバニ」シリーズにとってまさに運命的なものでしたね。1983年の「ウイングマン」から始まって、いくつものヒーローものを手がけられている桂さんには存在感のあるヒーローのデザインを、実写の監督でもあり、役者でもあり、脚本家でもある西田さんには実写ドラマを髣髴とさせるシナリオを手がけていただき、そこから編み出されたものでようやく具体的に制作が始まりました。アメコミ・ヒーローを思わせつつも、ごく身近にいそうな雰囲気を漂わせたキャラクターが繰り広げる人間ドラマ。おふたりの参入で「タイバニ」シリーズはアイデアレベルだったものが生き生きと動き出し、本当の作品へと踏み出せました。ビジョンが明確になったことによってスタッフひとりひとりの想いも加わり、ひとつの作品として昇華していく過程を現場で間近に体験できたのは、まさにプロデューサー冥利に尽きるの一言です。しかもそのできあがった作品に数え切れないほどのファンの方が支持をしてくれている。それだけでも感謝に堪えないのに、1度はアニメを卒業してしまった方々に、アニメの魅力をもう1度気づかされたと言っていただけた――それこそが「タイバニ」シリーズに携わったすべてのスタッフの喜びだと考えています。「タイバニ」でなかったらすれ違わなかったであろう人たちが集まって、ひとつの作品をつくりあげた――そんな人たちを結びつける仕事に携われたことは、万感胸に迫るものがあります。

『The Rising』は「タイバニ」シリーズの集大成として、米谷たに（ヨシトモ）監督を始め、多くのスタッフやキャストの方々が限界まで挑んだ作品です。無我夢中のまま、何とか形にしたいと思っていた作品が、ここまで成長することができました。完成まで時間がかかりましたが、それだけに「タイバニ」らしいかっこよさや画面の隅々まで飽きさせない楽しさ、壮大な音楽、そして彼らの生き様が詰め込まれています。是非作品を存分に楽しんでいただき、この作品に関わった方々の想いを少しでも観て感じていただけると嬉しいです。

でもですね、僕たちの想いは終わった訳じゃないですよ。テレビから始まって舞台、劇場版にまで拡大した「タイバニ」だけに、「ここからまた始まってく」ように、皆さんのなかで生き続ける「タイバニ」でありたいです。

僕ら「タイバニ」スタッフが生み出した彼らなら、きっとどんな舞台でも輝いてくれるはずですから。

（2013.12　上井草にて）

設

『劇場版 TIGER & BUNNY

資

TIGER & BUNNY THE RISING

MATE

定

『The Rising』の完成にあたっては無数の設定画が制作された。
ここでは、そんな貴重な設定画の一部を公開。
初公開のヒーロースーツ「ワイルドタイガー Style 2」を始め
キャラクター、メカ、美術ボードから主な画像をピックアップしている。

-The Rising-』ができるまで

SPECIAL EDITION feat.02

RIALS 料

『劇場版TIGER & BUNNY -The Rising-』設定資料
ヒーロー編

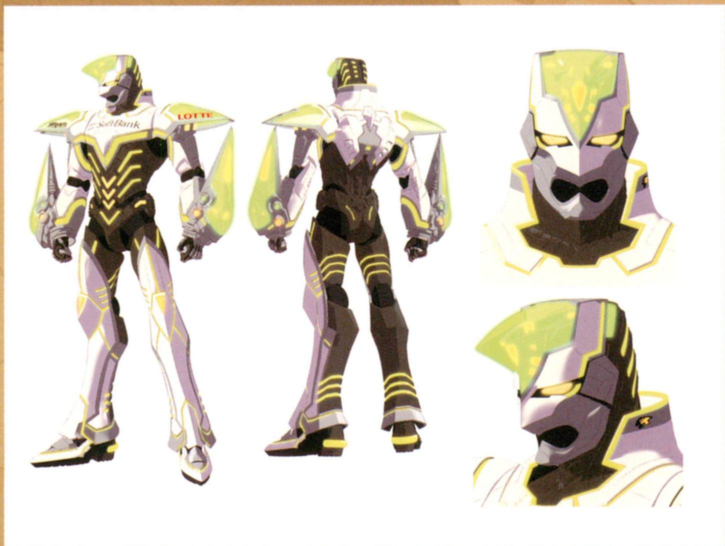
■ワイルドタイガー Style 2

脚部にモールドが追加された他、腹部のデザインも変更。さらに肩部装甲と首まわりのデザインとカラーリングも一新されたことで、全体的に力強さが強調されている。

■バーナビー・ブルックス Jr. Style 2

変更部分はワイルドタイガーと共通しているが、こちらはスピード感溢れるスマートなデザインが基調。また胸部、肘、手首、膝に青く輝く球形のモールドが追加された。

■ワイルドタイガー Style 2／設定画

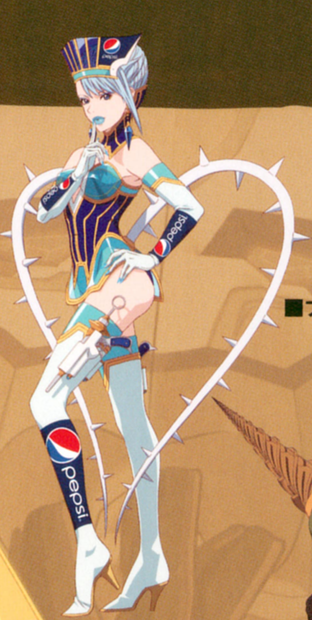


■バーナビー・ブルックス Jr. Style 2／設定画

1部リーグに返り咲いたタイガーとバーナビーに与えられた新型スーツ「Style 2」とライアンのスーツは、斎藤さんの手による自信作。その他のヒーローのスーツも一部プレイスメントが変更されている。

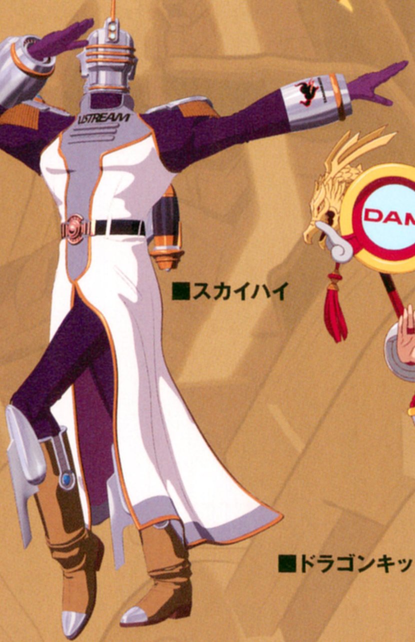
■ゴールデンライアン

所属企業であるアポロンメディアの象徴（グリフォン）を模したかのような巨大な翼が一際目を引く。黄金色の派手なカラーリングもライアンの俺様キャラを強調する役目を果たしている。



■ブルーローズ

■ロックバイソン



■スカイハイ

■ドラゴンキッド

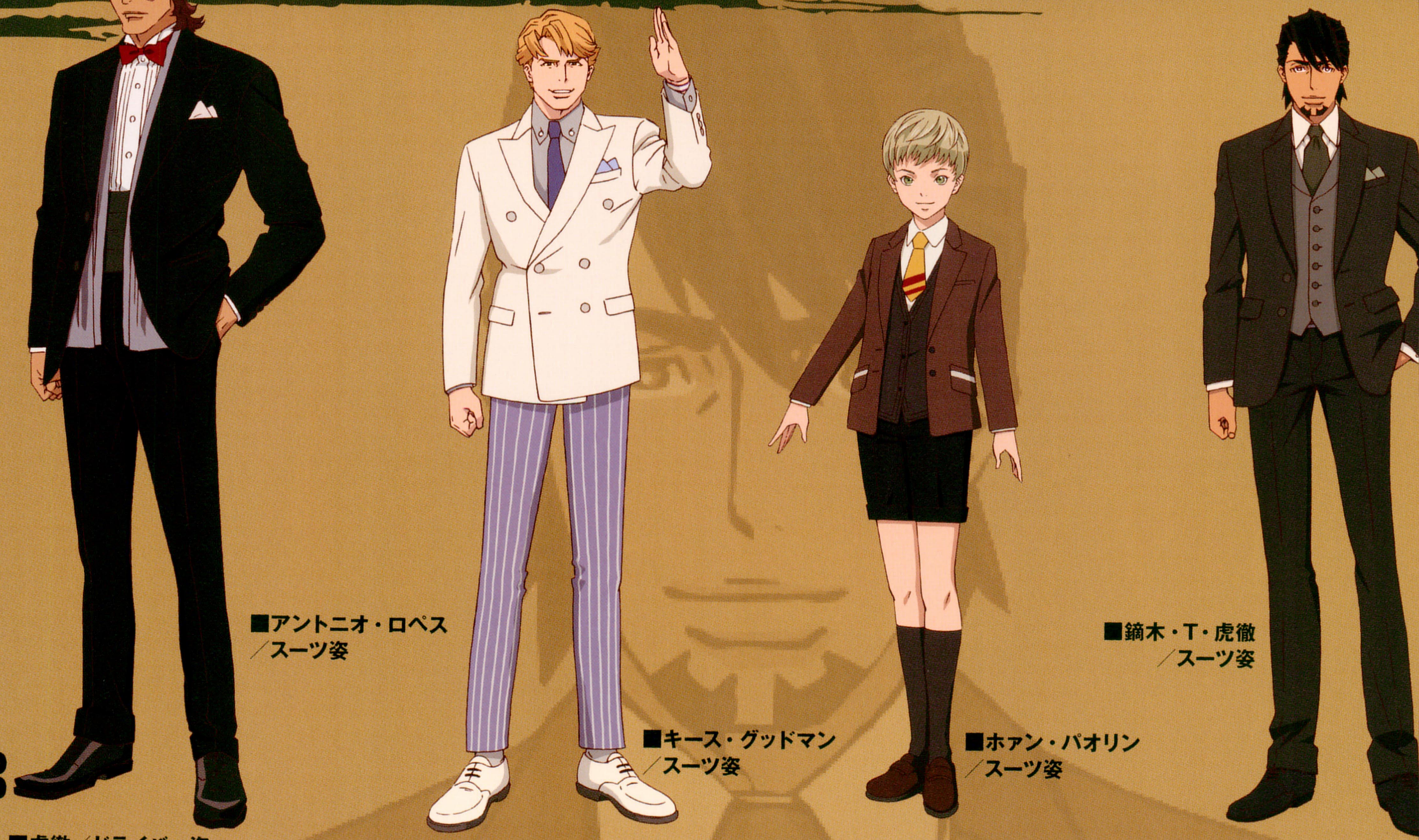
■ファイヤーエンブレム

■折紙サイクロン

■ルナティック

■ゴールデンライアン／設定画

『劇場版TIGER & BUNNY -The Rising-』設定資料
キャラクター編



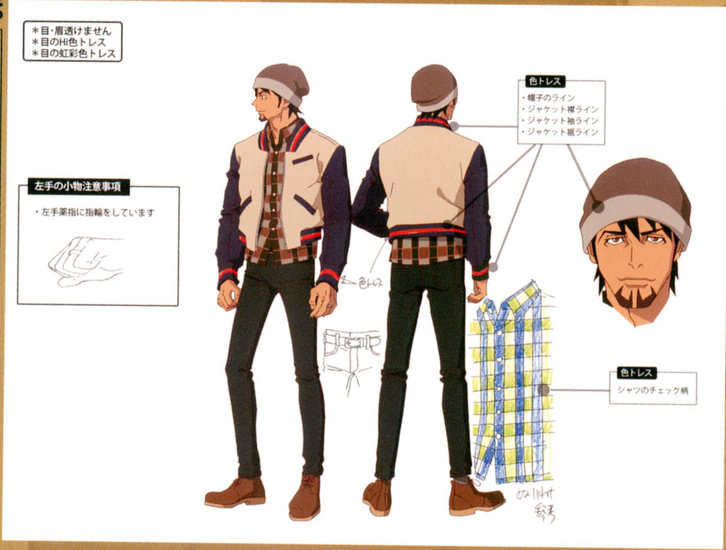
■アントニオ・ロペス／スーツ姿

■キース・グッドマン／スーツ姿

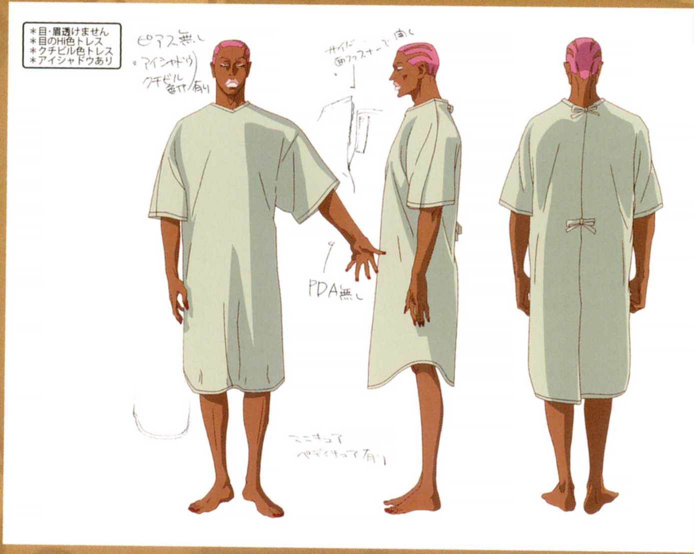
■ホァン・パオリン／スーツ姿

■鏑木・T・虎徹／スーツ姿

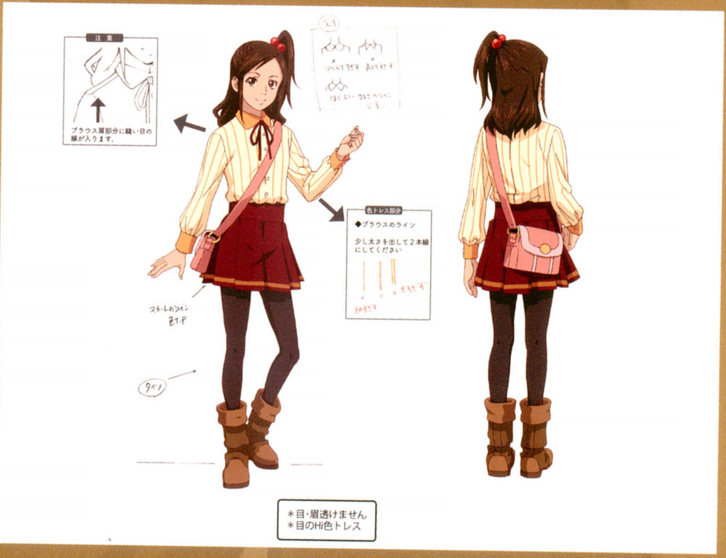
■虎徹／ドライバー姿



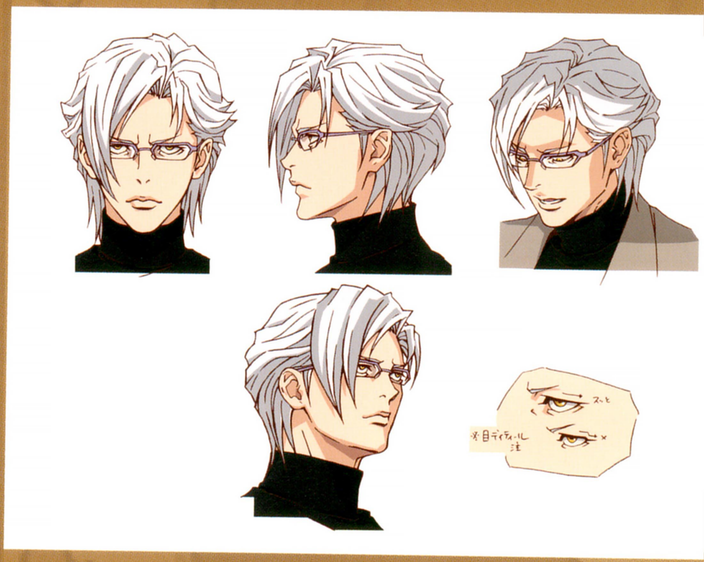
■ネイサン／患者服



■楓／外出着



■ヴィルギル／表情集



虎徹やバーナビーといったヒーローだけでなく、シュテルンビルトに暮らす市民たちの姿が
生き生きと描かれているのも本作の魅力のひとつ。詳細に設定されたキャラクターたちをここで紹介しよう。

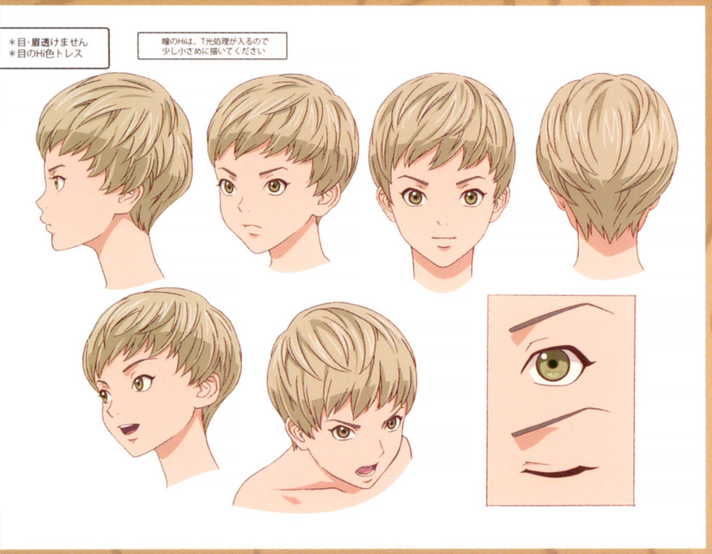
■バーナビー・ブルックス Jr.
／スーツ姿

■カリーナ・ライル
／ドレス姿

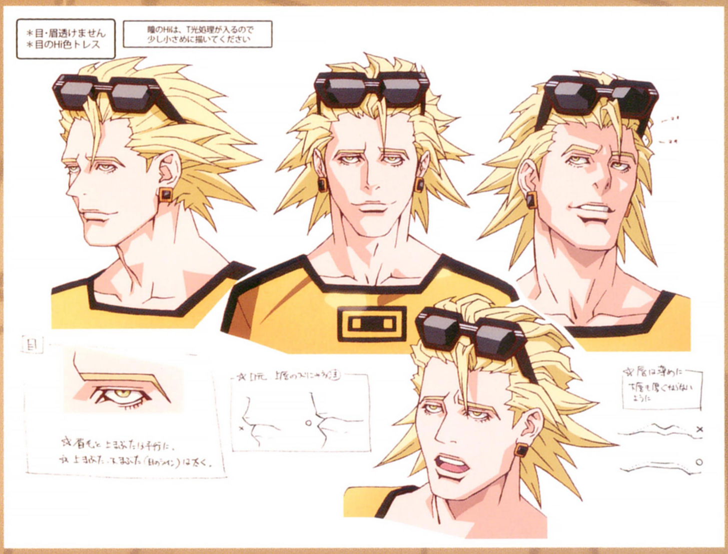
■ネイサン・シーモア
／スーツ姿

■イワン・カレリン
／スーツ姿

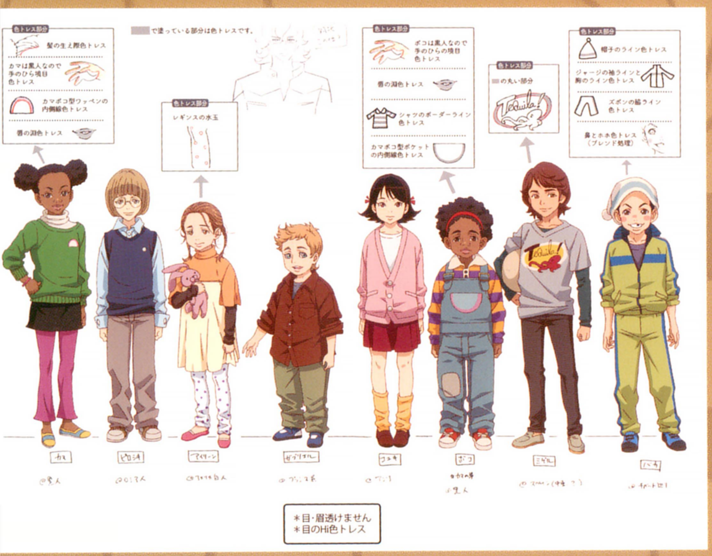
■パオリン／表情集



■ライアン／表情集



■シュテルンビルトの子供たち



■強盗犯

『劇場版TIGER & BUNNY -The Rising-』設定資料
メカニック&美術ボード編

ヒーローの活躍をサポートするメカニックや、ヒーローたちの活躍の場となるシュテルンビルトの風景も詳細な設定がなされている。ここでは『The Rising』用に新たに作成されたメカや美術ボードを紹介しよう。

■ロンリーチェイサー（ゴールデンライアン搭乗）／正面

ライアンの専用バイクはチョッパースタイル。ホイールベースも拡大されている。

■ダブルチェイサー／正面

合体時にはカウルが変形し、バーナビーの車輌と同サイズに収まる。

■ロンリーチェイサー（ゴールデンライアン）／背面

翼が干渉しないように、背部は比較的シンプルな構造をしている。

■ダブルチェイサー／背面

サイドカーというよりも、2台のバイクを横に連結したような外観。

■ダブルチェイサー（バーナビー&ライアン搭乗）

合体後のライディングはバーナビーが担当。一方のライアンはふんぞり返って目的地に到着するのを待つ。

■シュテルンビルト／街頭テレビ広場

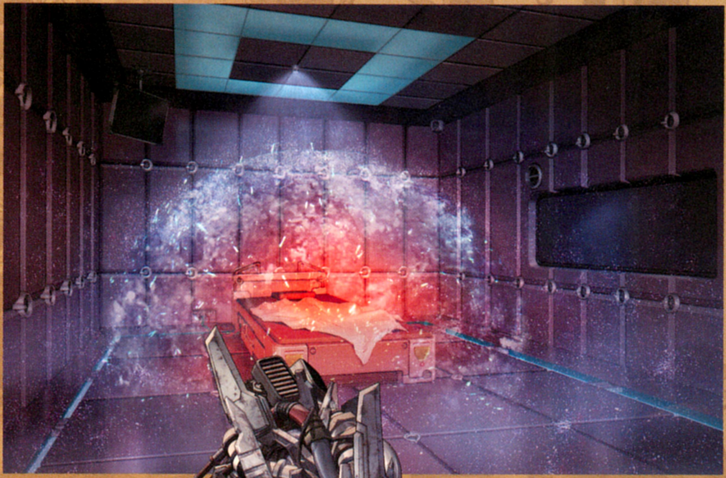
■シュテルンビルト／モノレール駅のホーム

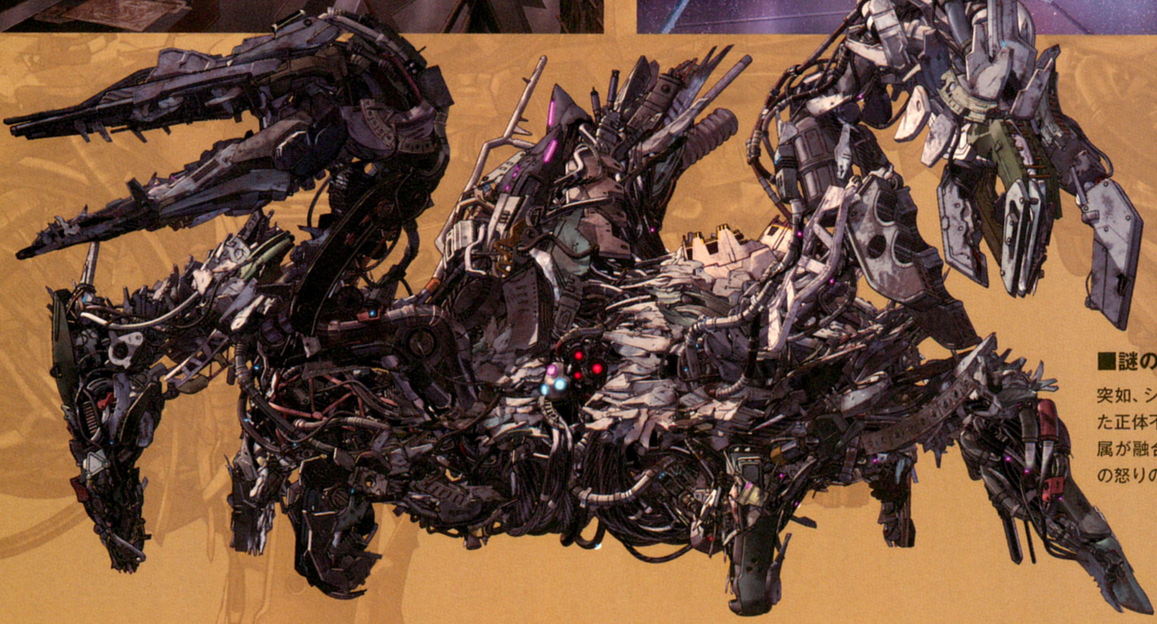
■新ヒーロー発表会／イベント会場

■ジャスティスデー／パレードの行列

■アポロンメディア／シュナイダールーム

■ネイサンの病室





■謎の巨大メカ

突如、シュテルンビルトに出現した正体不明の巨大メカ。無数の金属が融合した不気味な姿は、女神の怒りのあらわれなのだろうか!?

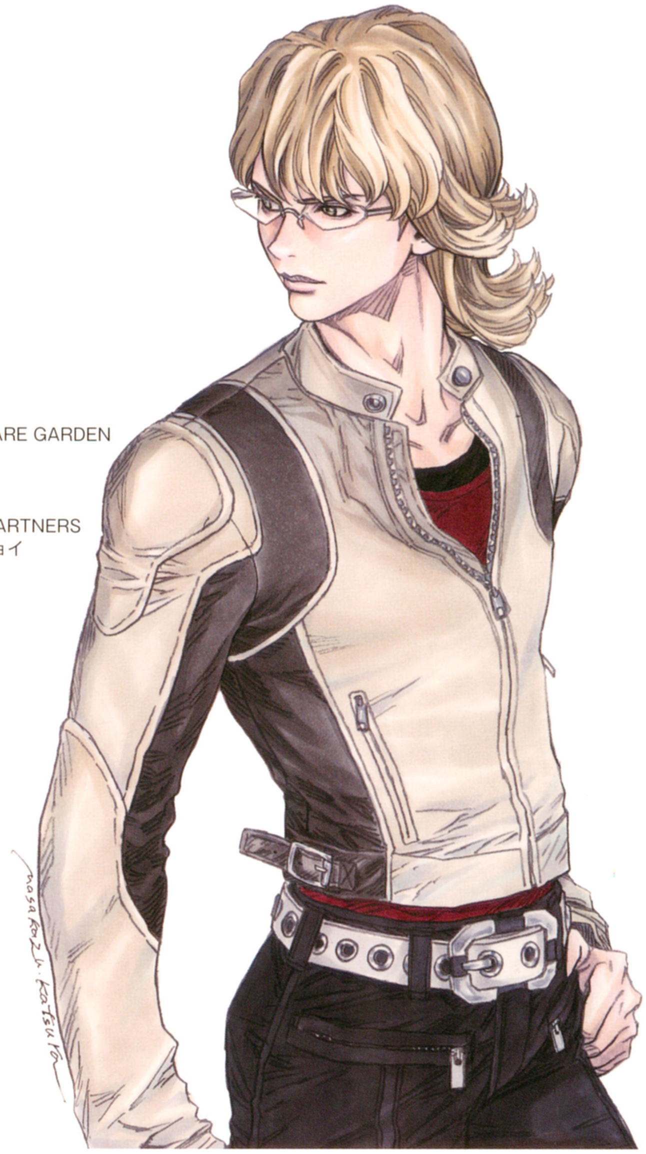
XI

CAST

ワイルドタイガー	平田 広明
バーナビー・ブルックス Jr.	森田 成一
ゴールデンライアン	中村 悠一
ブルーローズ	寿 美菜子
ロックバイソン	楠 大典
ドラゴンキッド	伊瀬 茉莉也
ファイヤーエンブレム	津田 健次郎
スカイハイ	井上 剛
折紙サイクロン	岡本 信彦
ルナティック	遊佐 浩二

STAFF

企画・原作	サンライズ
監督	米たに ヨシトモ
脚本・ストーリーディレクター	西田 征史
キャラクター原案・ヒーローデザイン	桂 正和
キャラクターデザイン・総作画監督	羽山 賢二
	板垣 徳宏
	山本 美佳
デザインワークス	小曽根 正美
メカデザイン	安藤 賢司
タイトルロゴデザイン	海野 大輔
色彩設計	永井 留美子
美術設定	児玉 陽平
美術監督	大久保 錦一
3DCGディレクター	笹川 恵介
撮影監督	田中 唯
	後藤 春陽
編集監督	奥田 浩史
音楽	池 頼広
音響監督	木村 絵理子
音響効果	倉橋 裕宗
音響制作	東北新社
主題歌	UNISON SQUARE GARDEN
オープニングテーマ	NOVELS
制作	サンライズ
製作	T&B MOVIE PARTNERS
配給	松竹／ティ・ジョイ



TIGER & BUNNY The Rising

2013年 | 日本映画 | 上映時間：100分 | スクリーンサイズ：ビスタサイズ | サウンドシステム：ドルビーデジタル
www.tigerandbunny.net
©SUNRISE/T&B MOVIE PARTNERS

2014年2月8日発行
発行：松竹株式会社 株式会社ティ・ジョイ
編集：松竹株式会社事業部 中居雄太
編集協力：渡辺洋三[メガロマニア]
デザイン：早川徹[早川デザイン事務所]
表紙＆外箱＆カードフォルダ／冨岡祥雄 渡部 岳[メタモ]
カードフォルダー描きおろしイラスト：桂 正和
表紙ビジュアル：作画／羽山 賢二
仕上／斎藤 麻由
3DCG／古川 厚[LARX ENTERTAINMENT]
フィニッシュ／永井留美子
印刷：株式会社久栄社
本体価格2,381円＋税
※本誌掲載の記事・写真などの無断複製・複写・転載(WEBを含む)を禁じます。

CAST

HIROAKI HIRATA　MASAKAZU MORITA　YUICHI NAKAMURA
MINAKO KOTOBUKI　TAITEN KUSUNOKI　MARIYA ISE
KENJIRO TSUDA　GO INOUE　NOBUHIKO OKAMOTO　KOJI YUSA

STAFF

Planning | Created by　SUNRISE
Director　YOSHITOMO YONETANI
Screenplay | Story Director　MASAFUMI NISHIDA
Character Design Concept | Heroes Design　MASAKAZU KATSURA
Character Design | Chief Animation Director　KENJI HAYAMA　NORIHIRO ITAGAKI　MIKA YAMAMOTO
Design Works　MASAMI OZONE
Mechanical Design　KENJI ANDO
Title Logo Design　DAISUKE UNNO
Color Design　RUMIKO NAGAI
Art Design　YOHEI KODAMA
Art Director　KINICHI OKUBO
3DCG Director　KEISUKE SASAGAWA
Director of Photography　YUI TANAKA　HARUHI GOTO
Editor　HIROSHI OKUDA
Music　YOSHIHIRO IKE
Director of Audiography　ERIKO KIMURA
Sound Effect　HIROMUNE KURAHASHI
Sound Design　TOHOKUSHINSHA

Theme Song　UNISON SQUARE GARDEN「harmonized finale」[TOY'S FACTORY]

Production　SUNRISE
Produced by　T&B MOVIE PARTNERS
Distribution　SHOCHIKU　T-JOY

©SUNRISE/T&B MOVIE PARTNERS